ヌエバ

NUEVA

革新の42枚パネル

日本リーグ唯一の公式試合球

あなたなら、どうたたかう…

NUEVA FORTY TWO

PAT. PENDING 42 PANELS

molten 42H301 SIZE 3

国際公認球 検定球

42H301WBK
42H201WBK・WR
●手縫い●天然皮革●42枚パネル

molten

SBHB作戦盤

検定球
HSH1
●手縫い●天然皮革●1号球
小学校試合球

国際公認球 検定球
42H310WBK・42H210WBK/WR
●手縫い●天然皮革●42枚パネル
全国中学校大会試合球

株式会社モルテン

東京本社　東京都墨田区横川5丁目5番7号　TEL(03)3625−7581(代)
東京・大阪・名古屋・福岡・広島四国・仙台・札幌・リノUSA・デュッセルドルフG

巻頭言

21世紀に向けて財務体質の強化を

日本ハンドボール協会常務理事

殿水　幸雄

日本ハンドボール界は、昨年世界ハンドボール界の最大イベントであります熊本での男子世界選手権を大成功に終えることが出来、この基盤を生かし、益々の発展を期しているところであります。このことは、東アジア大会の開催、大阪オリンピックの招致へと21世紀に向け若者に益々の夢と希望を与えるものと確信をしております。

これらの夢を叶えるためには、多くの事業を日本ハンドボール協会は遂行して行かなくてはなりません。しかし、これらの事業を展開していく日本協会の財務体質は、はなはだ脆弱なものとなっており、熊本の世界選手権は日本リーグオーナー会議の絶大なるご支援でこの難局を乗り切りましたが、普及対策、ジュニア対策としては充分なものではありませんでした。

また、今後の日本協会財務を眺めてみたとき、各事業を活発化させて行かなくてはならない反面、経済の低迷、少子化によるチーム数の減などの影響により、現状の事業活動を継続していくだけでも、収入を年間2千万円から3千万円増加させなければなりません。これらのことから、日本協会では財務の確立のためにいくつかの施策を打ち出しております。

先ず第一に、役員登録の案であります。本年度より、日本協会役員は役員登録費として登録金を決定いたしました。これは、機関誌先月号に市原専務理事が述べられているとおり、運営競技者としての役員もハンドボールの活性化に参画していこうと言う考え方に基づくものです。この考え方を加盟団体の方々にもご理解いただき、ハンドボールの活性化に寄与していただこうとするもので、全員参加、受益者負担の考えをお願いしようというものです。

第二に、登録金の値上げがあります。これについては昨年来、理事会等で訴えて参りました。しかしながら、登録金の値上げは固定費として安定な収入となりますが、すでに日本リーグなどから多額の登録金を載いていることや、若年層からの多額の徴収は好ましくないとの考えもあり、大幅な引上げは困難であると認識しております。

第三に、新会員制度としてのサポーター会員です。これはハンドボールの応援競技者としての位置づけと考え、企業、ハンドボールのOB、OG、あるいは父兄などにハンドボールの活性化に参画していただこうとするもので、時間をかけながら幅広く厚い支援組織を作り上げたいと思っております。

第四に、競技用具検定制度の見直し、並びに検定実施の確実化を目指しております。さらに、新たな検定業者の開拓も推進して参りたいと考えております。

また、その他にも幅広い事業活動の展開を考えていかなければなりません。日本協会オリジナルのグッズ販売等もその一つであります。

以上の様な施策を基本として、21世紀に向けた財務基盤の確立を目指す所在でありますので、全国のハンドボール関係者の皆様の絶大なるご支援、ご協力をお願いいたします。

協会だより

平成10年9月度常務理事会

日　時　9月12日（土）
　　　　10時30～16時00分
場　所　代々木第2体育館会議室
出席者　中澤副会長、市原専務理事、常務理事9名、監事1名、事務局2名

総務本部関連事項

1 役員登録について
新会員登録（案）について、平成11年度より実施に向け検討し、11月全国理事会へ提起する。また、チーム登録金の改正についても検討することとした。財源作りと合わせ還元方法についても検討する。

2 役員ユニフォームについて
各種大会で着用する役員用ユニフォームについて検討した。また、シンボルマーク等、ハンドボールの普及活動と合わせ機関紙等で公募する。

3 寄付行為改定について
寄付行為改定資料に基づき検討。第2章、第6章については承認。名誉役員についてはさらに検討することとした。

競技本部関連事項

1 懲罰規程について
日本リーグ規律規程について、承認。他の日本協会主催大会との関連については、現在は日本協会懲罰規程で処理することとし、次の競技会への影響については11年度に向け規程を整備することとした。

2 全日本総合日本協会推薦チームについて
平成10年度神戸大会は男女開催となるため、出場枠は男子16チーム、女子14チームを確認した。日本協会推薦チームについては、男子4チームに、北陸電力、本田技研熊本、デンソー、アラコ九州、女子2チームに、ジャスコ、ブラザー工業を承認。
全日本総合開催地について、平成11年名古屋市、平成12年広島市、平成13年東京もしくはこの近郊で開催することを申し合わせた。
開催地について、①営業収入（開催権料等）が得られる場所、②東京近郊では2年おきに開催、③会場は、3000人以上の観客動員可能な体育館、を基本的考え方とする。

3 普及について
市町村ハンドボール協会の末端までの組織を調査するため、各都道府県協会、各連盟宛に調査依頼することを決定。

4 ワールドゲームズフェアーについて
平成10年10月3・4日に秋田市で開催。ビーチハンドボールが実施検討競技となっていることから、競技規則について検討していく。

5 平成10年度登録について
各都道府県種別ごとに登録チームおよび個人の増減について報告。前年度よりチームおよび個人ともに減少しているとの報告。

6 全国中学校大会負担金増額申請について
全国中学校大会負担金増額申請について、平成10年度の収支予算書（案）を検討。中体連役員との協議等、再検討することとなった。

強化事業本部関連事項

1 アジア大会選手団について
第13回アジア競技大会選手団候補メンバーを報告。選手については、この中より男女とも16名が選ばれる。9月18日第23回日本リーグ記者発表で選手団について発表。

2 国内・国際大会結果について
第6回アジア大会男子ジュニア選手権（U—19）、第5回アジア女子ジュニア選手権（U—19）、第2回日韓スポーツ交流（U—16）、第6回中日韓ジュニア交流、男子ロシア遠征（U—23）について、結果報告。

3 強化委員会関係部門担当について
委員の関係部門担当について、資料で報告。

4 平成11年第24回日本リーグ日程（案）について
日本リーグスケジュール委員会案をベースに検討。男女世界選手権、全日本総合、国体、日本リーグプレイオフを確定し、ナショナル選手強化と調整した日程案を承認。

5 第23回日本リーグ記者発表について
9月18日に開催。各チームより、期待の若手と、ストックラン、ヴォルが出席。対戦カード、放映日程の報告。

報告事項

1 日本協会主催夏季大会結果報告
2 平成10年度第1回小学生専門委員会報告
3 学校体育ハンドボール研究集会報告
4 平成10年度全国理事長研修会について
5 審判部より、平成10年度IHF登録レフェリーの派遣実績と今後の派遣について報告。
6 競技部より'98ジャパンカップ、全日本総合選手権の広告協賛取得について協力依頼があった。

訃報

荒川清美名誉顧問（元副会長）急逝される

荒川清美（財）日本ハンドボール協会名誉顧問が、平成10年9月18日午前11時過ぎに、多臓器不全のため、ご逝去なされた。

荒川先生は、昭和25年より日本ハンドボール協会常務理事を務められ、以降、昭和42年からは理事長、昭和56年の財団法人化にあたっては初代の専務理事に就任され、昭和58年よりは副会長を務められました。また、本年4月よりは名誉顧問として日本ハンドボール協会にご尽力いただいておりました。この間、日本ハンドボールリーグの発足、日本ハンドボール協会の財団法人化など、多大な業績を残されております。まさに、今日ある日本ハンドボール協会の基盤を形作って来たと言っても過言ではありません。

また、スポーツ界におけるご活躍もハンドボール人として卓越したものがありました。日本体育協会理事を始め数々の役職を努められております。日本オリンピック委員会においては、日本オリンピック委員会が日本体育協会から独立法人化に際し、ご尽力なされ、監事、名誉委員としてオリンピックムーブメントの発展に寄与なされております。

さらに、国際的にも数々のご活躍をなされております。昭和17年に日独親善ハンドボール交歓国際試合日本代表選手として出場なされたのを初めとして、監督、役員として日本を代表して参加されております。また、国際ハンドボール連盟（ＩＨＦ）総会などにも数多くご出席なされ、昭和55年にはアジアハンドボール連盟の理事に就任されております。

これらの業績により、平成3年秋には勲三等瑞宝章を受章なされております。また、平成7年には、オリンピックオーダー銀賞を国際オリンピック委員会サラマンチ会長より授与されております。

お通夜、ご葬儀は、9月21日、22日に行われ、先生の偉業を偲び、荒天にも関わらず、全国各地から多数の方々が、ご参列になりました。

ここに、荒川清美名誉顧問のご生前のご指導に深く感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

アジア大会に挑む！

男子ナショナルチーム監督　蒲生晴明

はじめに、第13回アジア大会に挑むにあたり、この時期に日本代表の監督としてアジア各国と対戦出来る事に対しましては、感謝と責任を痛感しているところです。

さて、98年度の最大の目標は、「アジア大会での初優勝・エジプト世界選手権大会出場権獲得」です。我々男子ナショナルチームは、この目標に対して集中してトレーニングを積んでまいりました。そして、現在の21名のナショナルプレーヤーは、「合宿毎に、またポジション毎」に競い合って、その中から今回、16名が代表の座を勝ち取りました。現在の21名は、本年2月より実施してきた合宿の中で、競い合って勝ち残った選手であります。2月の強化合宿当初は、ベテラン・中堅の中心選手が、肩・膝・足首・腰などの負傷をかなり多く抱えており、全員での強化合宿はできませんでした。しかしながら、その間に若い選手が貴重な経験・体験を積みメキメキ伸びてきました。そして、9月になりベテラン・中堅の中心選手が負傷も完治し、再びカムバックしてまいりました。そう言った意味で、今回の選手選考については、かなりの時間をかけて、決定した訳ですが、非常に難しい選考でした。いずれにしても、代表にならなかった選手を含め、ナショナル選手に相応しい強化活動を実施してくれました。月並みですが、選手団一丸になって「初優勝」を狙います。

さて、今回のアジア大会は、13カ国のエントリーがあり、3つのグループに分かれました。我々日本は、予選B組で、韓国・オマーン・バングラディッシュの4カ国になりました。当然、韓国との戦いが注目するところですが、中東のオマーンとの初戦が予選リーグの「キーポイント」であります。

オマーンは、アジア大会・アジア選手権大会を通じて、初めての参加になりますが、先のアジアジュニア選手権大会では、中国・韓国につぎ第6位になっておりますし、優勝したバーレーンには、僅差の戦いをしている強豪チームです。この予選リーグでは、上位2カ国が第2次予選リーグへ進むことになっております。したがって、我々日本としては、このオマーン戦をなんとしても勝ち抜き、バングラディッシュを一蹴して、韓国戦で予選リーグ1位をかけての対戦にしたいと考えております。

予選A組は、クウェート・UAE・カタール・ヨルダン・タイの5カ国ですが、このグループではクウェート・UAE・カタールの中から2カ国が出てくるでしょう。

予選C組は、バーレーン・サウジアラビア・イラン・中国の4カ国です。このグループでは、バーレーン・サウジアラビア・中国の3カ国の争いになると思われます。

いずれにしましても、中東諸国の強化はかなり進捗しているものと考えなければなりません。かつては、韓国・中国を睨んでいれば済んでいた訳ですが、現在では一戦一戦が重みを増しており、気を抜けない戦いになります。

我々日本チームは、この1年間日本リーグ各チームの方々に絶大なるバックアップをしていただきまして、体力の強化を計画的に実施してまいりました。その効果としまして、ナショナル選手21名の平均体重が、目標であります「90kg」で推移しておりますし、今回の16名の平均体重についても、「89kg」であり、体格的なハンディはありません。体力的な強化についても、基本的な能力は、前年を上回っております。したがって、11月には戦術面を中心にトレーニングを実施していき、チームとして細かい部分について仕上げていくつもりです。しかしながら、一番大切な事は、メンタル面です。この面については、本年の日本リーグにおいて、強力な外人が入ってきた事により、例年と異なり緊張したゲームが展開されることで鍛えられるでしょう。さらにナショナルチームにおいても、11月にスウェーデンでの5ゲーム、そして帰国後ジャパンカップ（11月22日～25日・名古屋）での3ゲームを予定しており、このゲームにおいてより良い結果を出す事で確固たる自信に繋げていきたいと考えております。

おわりになりましたが、強化合宿で大変お世話になりました方々に、この場を借りまして、お礼を申し上げます。

組分け

■予選A組
クウェート、タイ、ヨルダン、アラブ首長国連邦、カタール

■予選B組
韓国、日本、オマーン、バングラデシュ

■予選C組
バーレーン、サウジアラビア、イラン、中国

日程

■予選リーグB組
12月7日・日本：オマーン
12月8日・日本：バングラデシュ
12月9日・日本：韓国

■準決勝進出リーグ
12月12～14日

■準決勝
12月16日

■決勝
12月18日

アジア大会に向けて！

女子ナショナルチーム監督　伊藤　宏幸

シドニー・オリンピック出場の夢の実現に向け、1998年4月からスタートした全日本女子チームの活動は、9月末現在、国内合宿40日海外遠征30日、計、約70日の強化を終え、いよいよシドニー・オリンピックに向けた第1の関門であるアジア大会を目前に控える事となった。

現在のところ、女子の参加国は7カ国（日本・韓国・中国・北朝鮮・カザフスタン・トルクメニスタン・タイ）となっており、このアジア大会上位の4カ国が来年12月にノルウエーで開催される世界女子選手権大会の出場権を得る。その世界選手権の上位5カ国と各大陸予選の1位（世界選手権上位5カ国は除く）及び開催国（オーストラリア）の10カ国がシドニーオリンピック出場となっている。

さて、シドニーオリンピック出場に向けた重点施策として、①基礎体力の向上、②基礎技術力の向上、③個人技術力の向上、④戦術・戦法の確立、を強力に推進しています。

①では基本的な走・投・跳のレベルを上げハンドボールの技術に結びつける。逆に技術に結びつけた体力アップを図る。

②ではゲームの中で圧倒的に多いパス・キャッチのミス発生率を軽減するため様々な難しい状況を設定した中でトレーニングを行う。

③では攻撃（シュート・フェイント・アシスト等）、防御（フットワーク・コンビネーション等）能力のレベルアップを図る。

④では、上記①～③のレベルを上げていく中で従来のオフェンス・ディフェンスのシステムレベルを上げ、日本独自の戦術・戦法を作り上げるべく努力しています。

韓国から招いた黄コーチ、北国銀行の荷川取コーチの情熱あふれるコーチングと選手達の大きな目標を胸に懸命に取り組む姿勢で、限界への挑戦を続けています。

アジア大会の成績目標は、ずばり「銀メダル」です。それも金メダルに近い銀メダルです。どれだけ近づけるか？どれだけ近づけたか？それがシドニー・オリンピック出場に向けて大きな試金石になる事は間違いありません。

今回参加する7カ国のうちトルクメニスタン、タイとは初の対戦となります。

また北朝鮮とも1993年のアジア選手権以来5年振りの対戦となります。

限りなく少ない情報の中で、自分達のやってきた事を信じて、また大きな自信として戦えるように更にレベルの高いトレーニングをこなして行きたいと考えています。

注目する選手、期待する選手。田中美音子キャプテンを中心に16名の選手全員に注目・期待をしています。

スタッフ・選手16名が一体となれた時に、初めて大きな勝利へのチャンスをつかめるのだと思っています。

最後になりましたが、全国のハンドボール関係者はもとより、多くの皆様方の暖かいご支援並びにご指導をお願い致しましてアジア大会に向けての抱負とさせて戴きます。

なお、アジア大会までの強化日程は次の通りです。お近くで強化合宿等行われる際は、気軽に見学にお越し下さい。

〈強化日程〉

11月4日～9日　ソニー国分（鹿児島）にて合宿
11月10日～16日　オムロン（熊本）にて合宿
11月17日～21日　ジャスコ（三重）にて合宿
11月22日～25日　ジャパンカップ'98（愛知）
12月2日　出発
12月6日～18日　アジア大会
12月19日　帰国

参加国

韓国、中国、日本、トルクメニスタン、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、タイ、カザフスタン

日程

■リーグ戦
12月10日・日本…タイ
12月11日・日本…北朝鮮
12月13日・日本…カザフスタン
12月14日・日本…中国
12月15日・日本…韓国
12月17日・日本…トルクメニスタン

派遣スタッフ・選手名簿

男子

監督	蒲生晴明	がもう せいめい	1954.4.5	日本協会強化委員
コーチ	酒巻清治	さかまき きよはる	1962.5.7	日本協会強化コーチ
コーチ	S.Kowalski	コワルスキー	1947.11.13	〃
ドクター	加藤　公	かとう こう	1955.12.29	三重大学医学部
トレーナー	赤尾和彦	あかお かずひこ	1966.9.29	トレーナーズ・フォー・アスリートC

選手番号	氏　名	所属先名	生年月日	身長	体重	出身高校	出身大学	出身地
GK 1	橋本　行弘（はしもと　ゆきひろ）	本田技研	1965.9.17	186	92	岡崎城西高	—	愛知県
16	坪根　敏宏（つぼね　としひろ）	湧永製薬	1973.6.4	188	90	久留米工大附高	福岡大	福岡県
12	日原　一幸（ひはら　かずゆき）	大同特殊鋼	1973.7.20	181	85	桜台高	名城大	愛知県
CP 4	佐々木教裕（ささき　のりひろ）	本田技研	1974.4.8	192	99	拓大第一高	日体大	東京都
5	冨本　栄次（とみもと　えいじ）	大同特殊鋼	1971.10.18	182	88	日体荏原高	日体大	神奈川県
3	角谷　裕司（かくたに　ゆうじ）	日新製鋼	1973.11.5	175	73	都島工高	天理大	大阪府
8	岩本　真典（いわもと　まさのり）	三陽商会	1970.9.28	200	89	熊本市商高	早稲田大	熊本県
7	中山　剛（なかやま　つよし）	湧永製薬	1969.7.4	191	93	久留米工大附高	福岡大	福岡県
＊ 10	末岡　政広（すえおか　まさひろ）	大同特殊鋼	1967.9.1	177	85	瓊浦高	福岡大	長崎県
13	藤井　孝志（ふじい　たかし）	大同特殊鋼	1969.7.27	190	95	高岡向陵高	筑波大	富山県
14	杉山　裕一（すぎやま　ゆういち）	湧永製薬	1972.9.21	190	98	岐阜商高	—	岐阜県
17	茅場　清（かやば　きよし）	本田技研	1973.7.8	185	83	笠間高	日体大	茨城県
18	山口　修（やまぐち　おさむ）	湧永製薬	1972.2.28	191	98	西宮南高	大体大	兵庫県
20	辻　昇一（つじ　しょういち）	大崎オーソル	1973.5.10	183	75	学法石川高	日体大	福島県
6	森山　透（もりやま　とおる）	湧永製薬	1974.8.6	172	70	熊本市商高	日体大	熊本県
19	広政　宣孝（ひろまさ　よしたか）	本田技研	1973.7.6	177	77	下松工高	筑波大	山口県

＊印はキャプテン

第13回アジア競技大会

団長	山下　泉（やました いずみ）
副団長	野田　清（のだ きよし）
〃	緒方嗣雄（おがた つぐお）
総務・広報	喜井美雄（きい よしお）

女子

監督	伊藤宏幸	いとう ひろゆき	1951.12.1	日本協会強化委員
コーチ	荷川取義浩	にかわどり よしひろ	1961.12.4	日本協会強化コーチ
コーチ	黄　慶泳	ふぁん きょんよん	1969.2.28	〃
ドクター	佐久間克彦	さくま かつひこ	1960.8.22	熊本赤十字病院
トレーナー	吉田奈央	よしだ なお	1972.10.6	ジャスコ

選手番号	氏名	所属先名	生年月日	身長	体重	出身高校	出身大学	出身地
GK 12	山口　文子（やまぐち あやこ）	オムロン	1975.10.22	173	67	境　高	—	鳥取県
16	山下美智子（やました みちこ）	大和銀行	1976.1.5	177	68	宣真高	—	熊本県
CP 6	青戸あかね（あおと あかね）	イズミ	1974.7.11	164	62	山陽女高	東女体大	広島県
5	小林　直美（こばやし なおみ）	香川銀行	1973.9.12	163	53	九州女高	福岡大	福岡県
17	熊谷　祐子（くまがい ゆうこ）	シャトレーゼ	1976.2.20	165	59	大曲農高	—	秋田県
13	池田奈美子（いけだ なみこ）	ジャスコ	1975.11.12	163	60	小松商高	—	石川県
＊ 8	田中美音子（たなか みねこ）	大和銀行	1975.1.14	160	55	四天王寺高	—	大阪府
14	倉知　光子（くらち みつこ）	大和銀行	1975.11.12	167	58	宣真高	東女体大	大阪府
15	藤浦　美絵（ふじうら みえ）	大和銀行	1975.12.19	171	70	夙川学院高	—	兵庫県
4	松本　恵美（まつもと えみ）	日立栃木	1973.7.6	172	70	国学院栃木	—	栃木県
2	沖土居真子（おきどい まさこ）	日立栃木	1971.6.19	155	48	春日井高	日体大	愛知県
7	小松真理子（こまつ まりこ）	北国銀行	1974.11.30	155	55	小松商高	—	石川県
10	田中由美子（たなか ゆみこ）	北国銀行	1975.7.25	176	68	小松商高	—	石川県
11	中村　友美（なかむら ともみ）	北国銀行	1977.6.23	168	60	福井商高	—	福井県
9	田中美代子（たなか みよこ）	北国銀行	1975.1.19	167	67	小松商高	—	石川県
3	宮本奈芳美（みやもと なおみ）	オムロン	1974.7.11	164	64	福井商高	日体大	福井県

＊印はキャプテン

第6回アジア男子ジュニア選手権報告。

第6回アジア男子ジュニア選手権が8月25日から9月8日までバーレーンの首都マナマで開催された。

今回の参加国は、日本を含め10カ国参加しており10カ国がA・Bの2グループに分かれて総当たりのリーグ戦を行います。双方の上位2チームが準決勝トーナメントに進み、勝った国がその時点で世界大会の切符を掴み、負けたチームによって3位決定戦が行われ、その勝者に最後の切符が与えられる。なお、今大会には、来年の世界大会の開催国カタールが参加しているためカタールを除いた9カ国によって3枚の世界切符を争うのでどの国もチャンスとばかり予選リーグから白熱した戦いが繰り広げられた。

10数年振りに世界大会出場を目指す日本も緒戦の韓国戦に勝って弾みをつけてBグループ2位以内を確保したい計画であったので1週間前より現地に乗り込みU－19、ナショナルチーム等と3試合を行い万全のコンディションで試合に挑んだ。

■予選リーグ第1戦

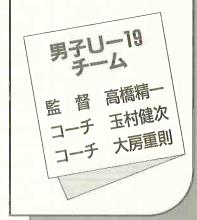
全日本U－19		韓国
27		29
14	前半	15
13	後半	14

[戦評]

試合開始早々、前田のシュートで先制し、両チーム互角のクロスゲームを演じるが、日本のミスにつけこまれ、20分過ぎに1点リードを許す。日本は、タイムアウト後フォーメーションから小倉が同点ゴールを決め追いつくが、結局1点ビハインドで前半を終える。

後半に入っても互角の展開だったが6分、9分と相次ぐ退場者を出し、その間に19対22と3点差とされてしまう。日本も粘りを見せ終了5分前に同点に追いつくが逆転のチャンスにノーマークシュートミスを連発してしまい逆に韓国に決められてしまう。残り30秒、同点にしたいためのオールコートDFもパスをつながれ2点差にされてしまい、そこでタイムアップ。勝てる試合を最後のツメの甘さで落としてしまい今後のゲームに不安を覗かせた試合であった。

■予選リーグ第2戦

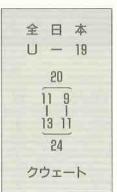
全日本U－19		台湾
28		35
15	前半	18
13	後半	17

[戦評]

試合開始27秒で台湾に先攻され、DFに不安を感じる。2分、2分30秒と警告を受け、日本DFが消極的になったところに立て続けにゴールを割られ、15分には5対10とダブルスコアになった。日本はたまらずタイムアウトを取り戦法を切り換えた。タイムアウト後2連取し、リズムに乗るかと思った

ところ退場者が出て、結局13対17と4点差をつけられて前半を終える。

この試合を落とすような事になればBグループ2位以内が非常に苦しくなるので、日本スタッフは、ハーフタイムにDFの変更と相手の帰陣が遅いのでマイボールになると早く相手陣内にボールを運ぶ事を指示。後半に入るとその作戦が功を奏し、5連続ゴールで18対18の同点に追いついた。しかし、そこから突然イージーミスを連発、それを逆に拾われ5連続失点をくらう。そのままズルズルと点差は広がり10点差をつけられる。3点を返したところで万事窮した。スタッフもなぜこのような展開になったか理解できず、それにしても同点になってからのイージーミスが悔やまれる。

■予選リーグ第3戦

全日本U－19			クウェート
20	11－13	9－11	24

[戦評]

もう絶対に負けられない日本、入念なビデオ分析とミーティングにより相手の攻撃パターンを読み、積極的なDFで得点を許さず、互角の展開が続いたが残り5分で退場者が出て3点差とされるが、終了間際に決めて9対11で前半を折り返す。

後半も1～3点差を追いかける展開が10分過ぎまで続くが、前田、太田が決めて15対15の同点にし、14分には山口がサイドから決めて逆転。この試合初めてリードを奪う。しかし、ここでも痛い退場者を出し、逆にリードを奪われる。日本も負けじと太田、前田のゴールで20対21としたが、残り5分のところで突然オフィシャルのブザーが鳴り、ベンチ前でミーティングをしていると、クロアチアのレフェリーから試合に出ていない選手がサイドラインを踏み越しているので不正入場と告げられた。納得いかない笛に猛烈に抗議したが受け入れてもらえず、結局その退場で3ゴールを奪われ、4点差で敗れた。IHF派遣のレフェリーまでもが平気で中東有利の笛を吹くなか、内容で勝って試合に負けたゲームであり、IHFに怒りを感じた。

■予選リーグ第4戦

全日本U－19			サウジアラビア
21	9－12	12－13	25

[戦評]

とにかく1勝をあげて予選を終わりたい日本。対戦相手は3連勝でBグループ1位が確定しているサウジアラビア。試合開始早々に沢田が決めて先攻する。しかし4分過ぎからパスミス、キャッチミスを拾われ10分過ぎには2対5とリードされる。

サウジ退場者の間に2得点返して4対5にし、GK高木が7Mスロー、ポストシュートをキープして21分には沢田が7MTを決めて9対8と逆転するが同点のまま残り5秒にサウジのフリースローから得点され12対13で前半を折り返す。

後半に入り、5分過ぎに退場者が出てその間にミスが続出し、13対18とされてしまう。しかし、日本も14分から6分間相手をノーゴールとDFを頑張るが、攻撃がちぐはぐで追いつく事が出来ずしかも、7MTを3本連続ではずす不出来。終盤相手が遅延行為で退場者続出になるが反撃時間がなく、そのままゲーム終了。結局Bグループ最下位となり順位決定戦を行う事が出来ずに第6回アジア選手権を終える。

中東での3～4回目の大会、前回でもこのような大会運営であったが、中東で行うときは必ず中東の為の中東の大会である。このままの状況だと極東は窮地に追いやられるのも時間の問題であるし、本当の意味で無駄な大会だとも思います。

予選の方法も新しいシステム（出場権3チームの場合、極東1、中東1、極東ｖｓ中東の勝者等）を取り入れてもらうしかないと思われます。

レフェリーの問題にしても試合開始15分前にレフェリー変更が平然と行われる状態で、IHF派遣のレフェリーが平気で中東有利の笛を吹くなど平等なところなど全然ないのです。

多くの問題点が出た今大会（今後のジュニア強化対策、世界選手権予選の変更、レフェリーの問題等）。これらの問題は、早急に解決出来ないかもしれないが、アジアを取り巻く問題だけでも解決してもらいたいと思います。

最後にこの2年間、U－19チームの為に貴重な時間や施設を提供して頂いた皆様に誌面を借りて心よりお礼を申し上げます。

また、今大会が国体予選などで選手及び国体関係者の皆様には大変ご迷惑をおかけ致しました事を心よりお詫び申し上げると共に今後共、ジュニアの育成の為にご指導、ご協力の程、宜しくお願いします。

今後のジュニア強化対策について

今回出場した選手達は、約2年前から2回の韓国遠征、国内に於いては、セレクション合宿、強化合宿など、男子ジュニア史上一番多くの時間と強化費を費やして強化して来ましたし、前大会の経験者も少ないが2名いました。にもかかわらず、なぜ今回このような結果になったのでしょうか？強化する期間がまだまだ少ないからでしょうか？

スタッフと選手とのコミュニケーションが不足していたからでしょうか？

サウジ、クウェート、バーレーン等中東勢がすごく強いからでしょうか？
中東での試合は、レフェリーまでも中東の味方になるからでしょうか？
強化期間については、特にハンドボールが国技のような国々には比べ物にはなりません。

日本もそれぐらい強化すればそれなりに少しは、強くはなるとは思いますが本質的には強くなれないと思われます。それはなぜでしょう？
1つ思うには、どの競技にも言える事ですが日本全体が裕福になり過ぎてしまい年々選手達にハングリー精神が薄れて来ている事ではないでしょうか？
ボールに対する執着心にしてもどの国よりも日本が一番劣っていたし、勝負に対してのこだわり、厳しさ、気迫、また克己心までも少なく感じました。
しかし、この事はジュニア強化スタッフだけの責任でしょうか？全国の指導者の方々にも選手の育成に関して今一度問いただして頂きたいのです。
オルソン前全日本監督が以前言っていたように試合は、戦争なのです。
やるかやられるかの世界なので

第6回アジア男子ジュニア選手権　スコア表

《1998．8・25～9・8　バーレーン》

グループA

TEAM	W	L	D	S	P
バーレーン	4	0	—	107— 98	8
中　国	3	1	—	124—101	6
オマーン	2	2	—	112—117	4
U・A・E	1	3	—	104—112	2
カタール	0	4	—	103—118	0

OMN 26—29 BRN
UAE 37—30 QAT
UAE 19—33 CHN
QAT 24—25 BRN
QAT 26—27 OMN
BRN 28—26 CHN
CHN 29—22 QAT
OMN 27—26 UAE
BRN 25—22 UAE
CHN 36—32 OMN

グループB

TEAM	W	L	D	S	P
サウジアラビア	4	0	—	102— 82	8
クウェート	2	1	1	90— 98	5
韓　国	2	2	—	108—111	4
台　湾	1	2	1	115—123	3
日　本	0	4	—	96—113	0

TPE 30—30 KUW
KSA 29—22 KOR
JPN 27—29 KOR
TPE 22—28 KSA
KUW 17—20 KSA
JPN 28—35 TPE
KOR 37—28 TPE
KUW 24—20 JPN
KSA 25—21 JPN
KOR 20—29 KUW

BRN(A－1)　24—20　KUW(B－2)
KSA(B－1)　23—18　CHN(A－2)
OMN(A－3)　36—43　KOR(B－3)　5～6決定戦
UAE(A－4)　0—12　TPE(B－4)　7～8決定戦

CHN　20—23　KUW　3～4決定戦　KUW　3位
BRN　25—20　KSA　1～2決定戦
BRN　1位，KSA　2位

●全日本U－19チーム個人得点表

No.	名　前	8／28 韓国	8／30 台湾	9／1 クウェート	9／3 サウジ	計
1	高木　尚					
12	松岡厚志					
2	沢田俊祐	5点	6点	1点	2点	14点
3	山口　航	1点	1点	3点	1点	6点
4	石川博之	0点	0点	—	0点	0点
5	小倉　学	8点	10点	4点	4点	26点
6	阪　昭博	3点	2点	1点	1点	7点
7	前田誠一	4点	—	2点	8点	14点
8	柳本義文	2点	3点	3点	1点	9点

No.	名　前	8／28 韓国	8／30 台湾	9／1 クウェート	9／3 サウジ	計
9	筆吉亮介	0点	1点	1点	—	2点
10	太田芳文	—	—	3点	2点	5点
11	田中秀樹	—	—	—	2点	2点
13	畠中益喜	4点	3点	0点	—	7点
14	長尾恒宏	—	—	—	0点	0点
15	窪小谷貴浩	0点	0点	—	—	0点
17	佐々木　優	—	1点	2点	—	3点
合　計		27点	28点	20点	21点	

す。
　最近の大学生、高校生の試合を観てもメンタル面でレベルの高い試合は、ここ数年観る事が出来ません。
　ではこれからどうしていけばジュニアが強くなるのでしょうか？1つ判っている事は、現在U－19の大会にはだいたい17～18歳ぐらいからしか強化出来ていません。ではもう少し下から強化するのはどうでしょうか。U－16の選手達を完全にセレクトしてしまい少数精鋭で3年後のU－19の大会の為だけに強化するのです。U－16の時に徹底的にハングリーな精神と基礎を叩き込むのです。
　その中で選び抜かれた何名かは、U－19の試合に出場させ早くから多くの経験をさせていきチームの半分ぐらいは、前回経験者になるようにチーム作りするのです。
　しかし、これだけでは、ジュニアは強くなりません。
　幸いな事に、日本は、10年後大阪でオリンピックを開催しようとしています。開催出来る出来ないは別として、オリンピックで金メダルを目指すぐらいの強化計画に早急に着手しなければ国技のようにしている国々には絶対に勝つ事は出来ません。全国にスカウト網を張り巡らして探すのです金の卵を！
　育てるのですスーパースターを！
　日本は今、ジュニア強化を真剣に見つめ直す時期に差し掛かっていると思います。

第6回アジア男子ジュニア選手権大会帯同レフェリー報告

国際審判員　後藤　登、清水宣雄

　8月25日から9月8日まで15日間行われた今大会には、サウジアラビア、クウェート、オマーン、カタール、UAE（アラブ首長国連邦）、中国、日本、そして地元バーレーンからレフェリーが帯同し、クロアチアからのゲストレフェリーと合わせて、9ペアによって大会が運営された。審判の指導、管理は、アジア連盟PRC委員の李之文氏（中国）によって行われ、ほぼ毎日レフェリーミーティングが開かれた。
　この大会には、次代のアジアのトップレフェリーを担うペアが、アジア連盟から指名された。日本からは、当初浜田・小笠原両国際審判員が指名されたが、生憎、両氏の都合が付かず、急遽我々がノミネートされた。
　アジアのトップレフェリーの選考会とも言うべき今大会に、両氏が参加出来なかったのは、非常に残念なことである。
　我々は、オープニングゲームの地元バーレーン対オマーン、UAE対中国、カタール対中国の3試合を担当し、高い評価を得ることが出来た。
　その結果、世界選手権の出場権をかけた準決勝第1試合、バーレーン対クウェート戦にノミネートされた。しかし、ウォーミングアップも済んだ、試合開始直前、僅か5分前に、アジア連盟会長（クウェートの王様）の電話による命令によって、理由も説明されぬまま、突然審判交代となった。
　異常な雰囲気の中で、UAEのレフェリーが担当したその試合は、前半10分過ぎに、ベンチ裏の観客席に居たクウェートの控え選手と役員が起こした、地元観客との小競り合いをきっかけに、クウェートのプレイヤーが、コートを囲む柵を乗り越えて介入する乱闘となり、流血したけが人が担架で運ばれるという事態になった。その結果、試合続行は不可能となり、準決勝第2試合と共に後日行われた。
　レフェリーミーティングでは、早い段階でイエローカードを3枚使って基準を示すことが指導され、ラフプレイに対しては、概ね厳しい判定が下されていた。しかし、中東での大会では、何が起こるのか予想が出来ない。今大会でも、直接失格は当たり前、暴力行為まで発生した。
　中東の大会に参加する度に、身の危険を感ぜずにはいられない。興奮気味の試合が終了に近づくと、会場警備の警察官がコートの回りを取り囲み、観衆やプレイヤーに注意をはらい、そして、終了と同時に警察官がレフェリーを保護する。我々の試合でも、興奮して向かってこようとするプレイヤーが、チームメイトに取り押さえられ、早々に控室に退避しなければならないこともあった。レフェリーも命がけである。中東のプレイヤーの血の気の多いプレイは、スポーツではなく、まさに闘争であり、これもアジアのハンドボールなのである。

第5回 アジア女子ジュニア選手権大会 報告
（兼 世界ジュニア選手権予選・1999年中国）

第5回アジア女子ジュニア選手権大会（兼1999年、世界女子ジュニア選手権大会予選）が、8月31日から9月4日まで、大阪・舞洲アリーナで開催された。

大会はカザフスタンの都合で急遽組合せが変更になるなど、大会直前まで、日程等があやぶまれる程、問題をかかえた大会であった。

試合は、日本対カザフスタン開幕となったが、残念ながら日本は準備不足がひびいたのか、1点差で惜敗してしまった。この後、チャイニーズタイペイには勝ったが、4位にとどまった。

今大会は、来年中国で開催される世界女子ジュニア選手権大会の予選を兼ねている。アジアに与えられた出場ワクは、前回の韓国の健闘もあり、4ヶ国である。この結果、日本は、来年の世界大会の出場権を獲得した。

試合結果

■8月31日　対カザフスタン

カザフスタンの都合により、開幕試合のチャイニーズタイペイとの試合を変更し行う。相手の状態もまったくわからない状態もあり、国際大会を経験する選手たちの状態もあり、恐る恐るスタートするが、前半全くペースが掴めないのと選手が開幕後の試合ということもあって緊張がひどく、常にカザフスタンにペースを取られ、日本のペースで展開出来ない状態が続く。何とか前半終了間際に追い上げ2点差で前半終了。後半に期待したが緊張度は変らず前半と全く同じ展開で5点差、6点差とひろげられる。ここで思いきって、谷口選手（184cm）を相手の高さに対抗するために起用したが、突然相手ペースが変わり追い上げるが及ばず20－21で初戦を落とす。

■9月2日　対中国

前半スタートは固くなり1－5とリードされる。高校生の渡辺をセンターで起用し、ようやく日本はペースを掴み一進一退の展開になる。渡辺・谷口の高校生コンビの働きで、前半を8－9で折り返し後半に向かう。後半になるとエースの菅谷が当たり出し好調の中国と渡り合うポイントになる時間帯での速攻失敗・7mスローの失敗などで中国を追い込むが、逆転をするところまでいかず19－20で敗れる。

■9月3日　対チャイニーズタイペイ

勝とう、勝とうとする意識が強過ぎ、自分のペースでゲームの展開が出来ず粘りのあるチャイニーズタイペイにつけこまれタイペイペースで展開、前半終了前に菅谷・谷口の得点などで3点差で折り返す。後半5点差をつけるが思うようなペースがとれず、2点差まで詰め寄られるがタイムアウトを請求し攻撃を支持、ペースを掴み7点差の22－15で初勝利をあげることが出来、ようやく本来の気持ちで戦えそうである。

■9月4日　対韓国

昨日のチャイニーズタイペイとの勝利によって、ようやく選手たちに気持ちが解れ韓国と互角に戦うことが出来、前半から一進一退の展開に持ち込む。特に菅谷のロ

第5回アジア女子ジュニア選手権大会成績

	TPE	CHN	KOR	JPN	KAZ	勝	負	分	勝点	得点	失点	差
チャイニーズ タイペイ		× 27-31	× 22-30	× 15-22	× 16-24	0	4	0	0	80	107	−27
中華人民共和国	○ 31-27		× 19-25	○ 20-19	○ 22-15	3	1	0	6	92	86	+6
大韓民国	○ 30-22	○ 25-19		○ 36-28	○ 31-20	4	0	0	8	122	89	+33
日本	○ 22-15	× 19-20	× 28-36		× 20-21	1	3	0	2	89	92	−3
カザフスタン	○ 24-16	× 15-22	× 20-31	○ 21-20		2	2	0	4	80	89	−9

1位　大韓民国
2位　中華人民共和国
3位　カザフスタン
4位　日　　本
5位　チャイニーズ　タイペイ

★ベスト　セブン（ミス大阪）

- ○ヒャン・ジ・キム　（韓　国）
- ○ボク・ヒー・ミュン　（韓　国）
- ○ヤン・リー　（中　国）
- ○ユーリン・リー　（中　国）
- ○クバーソバ・アレーシア　（カザフスタン）
- ○浅井　友可里　（日　本）
- ○リアン・ヤ・ピン　（チャイニーズ・タイペイ）

アジア選手権個人得点表

選手名	カザフスタン	中国	タイペイ	韓国	合計
近藤智重	2	2	1	1	6
中塚充子	3	2		−	5
黒木智恵	3			−	3
佐藤朋子	−	−	−		
菅谷美奈	3	7	6	5	21
加次木暁美		−	3		3
早船愛子	3	4	2	7	16
三浦みどり	−	−	1	1	2
山本由香梨	3	1	−	2	6
富田有美	3		−	−	
安心院裕子		2	1	−	3
渡邉千尋	−	1	4	8	13
小平智可	−	−			
谷口尚代			4	2	6

ング・ミドルシュートが良く決まり渡辺のセンターでの動きも良く、谷口のポストも合わせ15―19で前半を終了。後半も互角の戦いをするが、得意の速攻が走れず失敗の連続で韓国を脅かすところまでいかず28―36で敗れ、通算成績を1勝3敗で第4位で終了。

成果

初めての国際大会、そして初めての国際試合を経験する者ばかりのジュニア選手が経験した第5回アジア女子ジュニア選手権でありましたが、私達スタッフが予想していたよりもはるかに選手たちは大きなプレッシャーを感じていたように思います。8月25日よりの調整合宿では、各ブロックの国体予選などで選手全員が揃わず充分な練習も出来ないまま大会に突入し又、当初予定していたチャイニーズタイペイとの開幕試合もカザフスタンの都合により変更され、相手の状態も充分わからない状態で第1戦を戦いました。全体としての結果は、1勝3敗の第4位という成績に終わりましたが、カザフスタンの変更がなければ3勝は出来たと思います。選手たちは今回の大会は環境的に非常に悪い状態の中で良く戦ったと思います。特に選手登録した3人の高校生のセンター渡邉を初め谷口（184cm）・小平選手達の活躍は来年の世界選手権は勿論、今後の活躍に充分な手ごたえを感じた大会であったと思います。そして実業団1年目の菅谷選手（175cm）の急

成長、GK浅井選手（178㎝）のキーピングなど今後に期待出来る材料が多く出てきた大会であったと思います。今後の国内練習や海外遠征などを多く行い、世界で戦える経験さえ積めば充分戦える成果がありました。

アジア選手権の4試合を通じて、今後世界の8位以上を狙うには、困った時に得点を取ってくれる大エースを養成しなければいけないと強く感じました。アジア選手権に参加している各国においても必ずそういったエースが存在しています。今回の大会でも活躍した菅谷選手、谷口選手が将来の大器として存在出来る状態が確認出来ました。出来るだけ早く世界の舞台で経験を踏ませる方向で強化・育成することが急務と考えます。そして日本特有のスピードある攻守を確立し、今一気にやっていく必要があると考えます。最後に高校、大学、実業団等、日本全体が強化に力を合わせ、将来に向け国内の大会等の整備をして、ナショナル活動を国内大会参加の為に、意欲ある選手が犠牲になるようなことはなくしていかなければ本当の強化は出来ないと考えます。

責任者　井上浩一

第5回アジア女子ジュニア選手権大会を終えて

大阪ハンドボール協会事務局　大阪府立鳳高等学校　花野相三

今大会の開催にあたって一番苦労したのは、開催決定が5月上旬、大会が8月31日からと準備期間の日数が非常に短かったことである。特に、今年度大阪ハンドボール協会は、会長以下副会長、理事長、副理事長等役員が一新し、運営を始めたところであったので、大会開催に大変な不安を抱きながらの準備であった。

■大会開催にあたって

国際大会を開くのが初めてであるので、予算・運営・会場・チームの受け入れ等全く資料がなく、何から手をつけていいかわからなかったのが現状である。そこで、毎年国際大会を開催している広島県協会に資料をお願いしたり、実際に大会を視察したりした。

まず、資金面に関しては、日本協会、大阪市、大阪オリンピック招致委員会、日本リーグの各チームをはじめ各企業、個人等に賛助協力を依頼し、多大な協力を頂くことが出来ました。特に、自治体の援助に関しては予算策定前に協力依頼をしておかないと、年度途中では非常に困難でした。

会場準備では、ベンチ、オフィシャル席、放送員席、立会人席、AHF・日本協会役員席、シートの敷き方等細部に至るまで指示を受け、開会式・試合開始時までバタバタと準備に手間がかかった。会場設営マニュアルがあれば準備に手間取らなかったと思われる。

■国際大会の苦労

外国の選手・役員を迎えた対応で、実際に目の当たりにしないとわからないことが多々あった。特に、宗教上の理由による食事の制約が予想していたよりも厳しかったことである。本人に食べられる物を聞き、ホテルと食事メニューの相談をし、食べ残していないかなど、私にとって初めての経験であったので非常に頭を悩ました問題であった。選手はホテルの食事に対して概ね好評であった。内容的には、どの国の選手も生野菜はあまり食べずフルーツをよく食べていた。

最初は中国・韓国・チャイニーズタイペイ・日本の4カ国で開催の予定が、カザフスタンも参加する事になり5カ国で抽選し試合日程も発表した。しかし、カザフスタンが参加・不参加が不明となったが、参加が決定したら今度は1日先に帰国することになった。急遽抽選のやり直し、日程の変更を余儀なくすることになった。国際大会ではよくあることかわからないが、参加・不参加が最後までわからない事に驚いたが、プログラム等すべてに影響することなのでどうなることかと気をもんだ。

■観客動員

観客動員に関しては、大阪高体連、中体連に観客動員を依頼した。また、高体連を通じて、近畿・全国のチームにも動員をお願いした。しかし、2学期が始まったこともあり、思うような動員が出来なかった。今後、各方面に観客の動員をお願いし、大会を盛り上げる必要がある。

■今後への反省

今大会のように、国際大会開催経験のない者が、何をすべきか先の見えない状態で開催する事の困難さを知らされた。開催決定から大会までの期間が4か月あまりでは、資金面、大会の案内等十分には出来ないし（観客動員にもつなが

る）、国際大会を開催するには十分な準備期間が必要である。
大会前に日本協会と打ち合わせしたにもかかわらず、会場設営や、ビデオ撮影の著作権の問題など漏れていることが多く、実際に大会が始まってからあわてて対処することが多かった。我々も、AHF役員・審判の送迎の配車など不手際なこともあった。このように生じる問題点を円滑に解決するには、事前はもちろんのこと大会期間中も、日本協会と主管協会が十分な話し合いを持つことが必要であると強く感じた。
最後になりましたが、今大会にご協力をいただきました皆様に感謝するとともに、2001年に、大阪で開催する東アジア大会も、今大会において経験したことを生かして大会を成功させたいと思います。

第5回アジア女子ジュニア選手権に参加して

コンチネンタル・レフェリー　仲田稔、植村彰

レフェリーミーティングは、大会、開催国によって行われたり、行われなかったり様々です。今大会では、毎日細かく行われ、AHFからはパク氏（韓国）、オメーラ氏（サウジアラビア）、カラフ氏（クウェート）の3名が審判員の管理に当たり、試合後のミーティングについては、カラフ氏とパク氏が中心で行われました。
審判員は日本、台湾、韓国、中国（女性ペア）、ゲストとしてクウエートペアの計5ペアで割り当てられました。この中ではクウェートのペアだけが始めて見るレフェリーでしたが、落ち着きがあり、アバウトに見えましたが全体を通して安定しており、今大会で一番良かったのではないでしょうか。
レフェリーミーティングでは、国内で言われていることとさほど目新しいことはありませんでした。その中でも、カラフ氏とパク氏が強調して言っていたことを述べます。まず、ゴールレフェリーは笛を吹いてしまったならフリースローの方向指示はしないでコートレフェリーに任せろということでした。ゴールレフェリーとコートレフェリーの役割分担をきちんとしなさいということです。ある試合で、ゴールレフェリーがコート中央でコートレフェリーの見逃したダブルドリブルを吹いたことについても試合の流れがスムースであったにもかかわらず、夜のミーティングではゴールレフェリーの範囲ではないので吹かないようにとのことでした。

毎日のミーティングを通して感じたことは、疑わしきは罰するといったような感覚で、見逃したプレーについては細かく注意されると言うことです。しかしながら、オーバーでないステップをオーバーと判定したり、退場でない場面で退場の判定をしたとしても何のコメントもありませんでした。むしろ外からラフに見えたプレーについてはもっと退場を出せということでした。
体育館の中で実際にコートに立ってみると、客席から見るより広く感じ、立体的な感覚がつかみづらくボールも微妙なバウンドの変化のためかチームもイージーなキャッチミスが目立った。結果は、日本は1勝3敗であったが、カザフスタン、中国戦は共に惜敗であり、実力的には日本が5点差くらいで勝ってもおかしくないものでした。それは、技術面より精神面で、力が出し切れなかったためではないかと感じました。
最後に、今大会を運営して下さいました大阪協会の皆様には、朝早くから、夜遅くまで大変お世話になりました。大阪協会の組織的な面は素晴らしく、今後の活動の参考にさせていただきたいと思います。この場をお借りしてお礼と感謝の言葉とさせていただきます。

第5回アジア女子ジュニア選手権大会

産業医科大学整形外科教室　**阪田　武志**

はじめに

平成10年8月31日から9月4日まで大阪（舞州）で第5回アジア女子ジュニアハンドボール選手権大会が開催された。日本の他、韓国、中国、台湾、カザフスタンの5カ国による大会となった。成績は1勝3敗で4位という結果に終わったが、負けた試合はいずれも大接戦であり、実力差はほとんどないというのが実感であった。直前合宿・大会期間を通じて、参加選手が大きな外傷を受けたり体調不良に陥ったということがなく、メディカルスタッフとしては一安心というところであった。以下、メディカルチェック、大会中のケア、ドーピング対策等を中心に報告する。

メディカルチェック

日本チームは、8月25日から直前合宿を行っていたが、メディカルスタッフは、トレーナーとして安部相子先生（浜脇病院）が8月29日から、ドクターとして私が8月30日からの合流となった。メディカルチェックは、8月30日に行った。

過去に何度か報告してきた通り、今回も足関節外側靱帯損傷（ATFL、ATFL&CFL）の選手が多く、16名中13名が1～2度。の損傷を有していた。いずれも、陳旧性であり、陳旧性の部分を合宿期間中に再度痛めたものが1名いた。現時点で投球障害肩を持つものが3名、非投球側の陳旧性肩関節唇損傷（大会後手術予定）1名の計4名、その他、投球側の肘に障害（内側側副靱帯損傷、過伸展障害）をもつものが計5名いた。肩・肘等上肢の障害のほとんどが、ディフェンスやシュートでの接触プレーを契機に生じていた。腰痛、膝靱帯損傷を含め、詳細は別紙に記載しているが、いずれもテーピング、マッサージ等で対処できるものであった。ジェネラルコンディショニングに関しては全員良好であった。

大会中のケア・ドーピング対策

大会中に微熱程度の発熱を訴えた選手は2名いたが、いずれも解熱剤の服用で軽快した。また、試合中に打撲や足関節捻挫を生じた選手が数名いたが、テーピングや試合後の理学療法で十分対処できるレベルであった。ドーピングコントロール対策としては、薬はドクターが一括して管理し、必要な時に選手に処方するようにし、栄養ドリンク等はとらせないようにした。ただ、今回は結果的にはドーピング検査は執行されなかった。

おわりに

国際大会とはいえ日本国内の大会であったためか、通常海外で悩まされる下痢、食欲不振、風邪等は全くみられず、コンディション的には全く問題なかった。ただ、ジュニアのような若い選手は、コンディショニングも含め経験を積ませるといった意味では、海外の厳しい状況で大会に参加していた方が良かったのでは？という気がした。

ANA CARD

ANAカードなら、旅の応援機能満載。マイレージの楽しさも大きく広がります。

空港でも余裕の
チェックイン

出張先でのショッピングも
バックアップ

旅の安心。
保険もサポート

ホテルのご利用も
おトク倍増

航空券ご予約が、
スムーズアップ

ショッピングでマイルを貯めるならやっぱりANAカード!

お買物やお食事でもカードでしっかり貯めやすい

クレジット会社のポイントを100円=1マイルで貯められます。

一度で2倍貯まる「ショッピングアルファ」も充実

下記のお支払い内容なら、100円=1マイルを自動的に加算。クレジット会社のポイントによるマイルと合わせて、100円=2マイルになるうれしいサービスです。

■対象商品・店舗

●国内全日空各支店、空港カウンターでの航空券のお求め、および機内販売　●髙島屋　●日本石油SS　●出光SS

ANA   NISSEKI 出光

さらにボーナスマイルで貯めやすさがアップ!

飛ぶたびに基本マイレージの15%(ワイドカードの場合。一般カードは5%)のボーナスマイル。また、毎年初めてのご搭乗時に3,000マイル(ワイドカードの場合。一般カードは1,000マイル)のボーナスマイルでおトクに貯まります。

今なら、一般カード初年度年会費無料サービス中です

今日からマイルが貯められるインスタントカード付き

お問い合わせ、入会申込書のご請求は、フリーダイヤル 0120-029-707まで
[受付時間]9:30～17:00(土・日・祝・年末年始を除く)
全日空各支店、空港カウンターにもございます。

「文殊の知恵を集めましょう」

企画・広報委員
早川　文司

Free Throw フリースロー

日本ハンドボール協会は市原専務理事体制スタートいらい、かなりのパワーで改革を遂行しようとの心意気が感じられるのは、なんとも頼もしい限りである。機関誌９月号の巻頭言で同専務理事が「３本部制の実施とその意義」と題して書かれている。最も述べられたいことは、「ハンドボール文化を日本に普及･定着させるためにはどうすべきか」であろう。そのためには携わるすべての者の意識の改革が大切であるということではないだろうか。

世界のスポーツ界は猛烈なスピードで発展し、また、物事が進んでいるのが現状である。いまや一歩の停滞すら許されない時代といってもいい。わずかな停滞が取り返しのつかない大きな損失を招き、取り残されてしまう危険性すらあるのではないだろうか。

“改革”を断行するには、今が最高のチャンスである。「鉄は熱いうちに…」という素晴らしい先人の教えがある。笛吹けど踊らずでは、せっかくの新執行部誕生も泡と消えてしまう。引っ込み思案では物事に前進はない。思ったことは即座に提案し、議論を重ね、実行に移すことが大切である。ここはしっかりと胸にたたきこんで、専務理事のプラン推進に全関係者が一致団結することを期待している。

ところで、同じ９月号の末尾に「寄稿募集」が掲載されている。「日本ハンドボール界発展に貢献すると思われる建設的かつ、発展的なご意見、ご提案を大々的に募集する」とある。その意義は大変結構なことではある。ただ、募集要項を見た場合、「所属県、もしくは所属団体」とは、どういう意味なのだろうか。いわゆるハンドボールに携わっている人だけが対象なのだろうか。とても気になるところだ。

事情をよく理解しないで申し訳ないが、もっと一般のファン、スポーツ愛好者に広く呼びかけることを考えたらどうだろうか。日本リーグや全日本総合選手権の会場に投稿を呼びかけるポスターを貼るとか、あるいはそこで配布するチラシにメモ欄を設け、「投書箱」を置いて広く意見を募ることも大切なことのように思ったりする。あるいは「ハンドボール界への提言」といったシンポジウム開催も一手段だろう。言いたいことはただひとつ。「井の中の蛙」であってはならないということである。内部の頭のきりかえは当然必要だが、広く社会の“頭脳”を集め、吸収することも考えたいものだ。「文殊の知恵」とは、昔からよく言ったものである。

列島縦断　【富山県の巻】

第55回国民体育大会　あいの風　夢のせて
2000年とやま国体を成功させよう

富山県ハンドボール協会理事長　城川俊久

2000年とやま国体秋季大会まで、2年を余すところになりました。

2000年とやま国体が21世紀の国体のモデルとなることをめざし、富山県の魅力を盛り込んだ県民総参加の感動の祭典となるよう準備が進められております。

当協会においても、競技別総合優勝が大きな目標ではありますが、選手・スタッフはもとより協会一丸となり努力していきたいと思っております。

過去には、少年男子の部において、昭和52年、53年、54年に氷見高等学校が国体三連覇を成し遂げるなどの輝かしい成績を上げております。

その当時中心選手でありました西山清さんは全日本選手として活躍し、また、一昨年熊本県で開催されました世界選手権に出場しました藤井孝志選手（高岡向陵高等学校出身）などを輩出しております。

また、2000年とやま国体に向け、数々の事業を行っているところであります。

●ジュニアの育成について

小学生については、各学校単位及び地区単位でスポーツ少年団といった方法で育成を行い、大会や練習会の開催を行い、北信越大会においても交流会を含めた大会を行うなど、ハンドボール競技のレベルの向上に努めております。その結果、平成9年には全国大会において男子の部で見事窪小学校が優勝、女子の部で仏生寺小学校が2年連続準優勝を成し遂げ、確実に成果を上げてきております。

また、中学生におきましても、平成4年度より県外チームを招聘し立山カップを開催するなど強化事業を行っており、平成5年には全国中学校選手権において準優勝、平成6年にはjocジュニアオリンピック選手権で優勝しております。

高校生におきましても、少年男子では、平成4年度より県外チームを招聘するトヤマカップを開催し、少年女子でも平成7年から雷鳥カップを開催するなど強化事業を行っており、平成6年に富山県で開催しましたインターハイでは少年男子はベスト8、少年女子ベスト16、平成8年度インターハイにおいて少年女子が3位の好成績をあげております。

●一般について

2000年とやま国体に向けて、各競技において実業団チームができる中、平成6年度に立山アルミハンドボール部女子チームが創立され、平成7年度から日本リーグ2部に出場し、平成8年度には1部リーグに昇格するなど著しい活躍であります。

男子につきましては、氷見クラブを中心に行ってきましたが、平成9年度より実業団登録を行い、幅広く活動をしているところです。

今後は、遠征事業や招聘事業を行い、レベルアップに努めていきたいと考えております。

このように、2000年とやま国体に向けて、ジュニアから一般まで連携を取りながら選手強化に取り組んでいるところでありますが、更に韓国遠征や優秀チームの招聘を行いながら、より一層の強化に取り組んで行きたいと考えております。

また、競技運営につきましても、審判養成並びに協会組織の強化に取り組んでいるところであります。

更に、平成12年度から3カ年高等学校選抜大会を氷見市で開催予定であり、平成13年度にはインカレを開催予定であります。

この様な大イベントの開催を行うことにより、富山県ハンドボールの裾野が広がり、今後のレベルアップにつながると思っております。

全日本U－23・東日本学生選抜ロシア遠征報告

全日本学生ハンドボール連盟理事長
㈶日本ハンドボール協会強化委員　福地　賢介

第15回男子世界学生選手権大会は、本年12月28日から来年の1月7日まで、ユーゴスラビア（ノビサト市）にて開催されるが、参加選手の選考も大詰めに入って、今回のロシア遠征が最終選考となった。

選考結果は、U－19のアジア予選の結果も加味し検討して、研修選手（次回のための育成選手）と共に、10月末までには発表したいと思っている。

昨年5月に各地区学生連盟から推薦を受けた選手と、全日本学生連盟男子世界学生専門委員会推薦選手の約40名を第一次選考し、その後、第二次選考会で約20名に絞り込み強化合宿、各地区リーグ、ヒロシマ国際等を選考対象としながら、今回のロシア遠征が、最終選考となった。

日本ハンドボール協会の強化委員会の強化方針により、全日本学生選抜も全日本U－23チームに包括されて、全日本チームに優秀な人材を送り出すことを主要目的として、強化を押し進めることとなった。スタッフは、松井幸嗣監督の海外留学（ケルン大学）から松喜美夫監督（全日本学連理事）にバトンタッチされ、新たに田村修治コーチ（全日本学生選抜コーチ）と玉村健次コーチ（U－23コーチ）が就任し、松監督をアシストすることとなった。

なお、留学中の松井氏は、ドイツの強化合宿からコーチとして参加予定である。

前回（1996年）も、同時期に初めてのロシア遠征を行ったが、最終選考条件に合う環境や経費の問題等から再度の遠征となった。

スタッフは次頁のとおりであるが、玉村コーチがジュニア予選の方に帯同した関係で、今回は、松監督、田村コーチの指揮となった。

U－23のみでなく、学生連盟では強化のために、東日本学生選抜や各地区学生連盟の選抜チームの海外研修遠征を行っているが、今回、最終選考と強化のための厳しいチーム環境の中でサバイバル的に遠征するU－23チームと帯同することにより、その厳しさを少しでも研修遠征のプラスになるべく計画し、東日本学生選抜の研修遠征を、ロシアハンドボール協会・クンツボ・チェスカ両クラブの協力で、受け入れが出来て、初のロシア研修遠征（個人負担）が実現した。

研修遠征ではあったが、この中にU－23の追加候補に該当する選手の新たな発掘も目的のひとつであった。

自分がU－23チームのチームリーダーを務める関係で、東日本学生選抜の団長兼監督には、海外遠征の経験豊富な滝口三郎関東学連理事に依頼した。

8月26日、アエロフロート国際航空で出発、同日夕方モスクワに到着して、モスクワ・オリンピック時の選手村の宿舎に入り翌日からの活動に備えた。

全日程の10日間をモスクワに滞在したが、到着日と出発日を除くと実質8日間でU－23が7試合、東日本学生は7試合と1日の講習会という、ややハードなスケジュールであったが、ハンドボールのみでなく、ロシア事情、その他の

経験も出来て、U－23及び東日本学生は共に所期の目的を果たし、9月4日18時15分発のアエロフロート国際航空でモスクワを離れ、5日の9時15分に成田空港に無事に到着した。なお、U－23及び東日本学生の戦績は別記のとおりである。

U－23は、クンツボーI及びチェスカのスーパーリーグチームと5試合、クンツボーIIと2試合であったが、スーパーリーグの両チームは、共に、高さ、パワー、スピード、ボールに対する執着心と、基本に忠実なプレーを見せてくれた。選手のみでなく各試合共両監督の熱心な指導と真剣な采配が見られた。

クラツホフ（クンツボ）・マキシモフ（チェスカ）両監督は、9月5日からロシアスーパーリーグが開幕するために、強化、調整の時期であり、スケジュール的にはちょうど良く、今後もこの時期の受け入れに支障のないことを申し出てくれた。

選考後のチーム構成や戦術面の問題、オフェンス・ディフェンス面の課題もチェックされており、代表選手及び研修選手が決定後は98ジャパンカップ、強化（ドイツ）・調整（ハンガリー）合宿を経て本大会に挑むスケジュールであるが、今後も積み上げが大事となっている（技術的なことは別記の松監督の評を参考願う）。

東日本学生選抜の研修も、前述のごとく、所期の目的を十分に果たしており、各地区のリーグやその他の活動に生かされてくると思われる。

参考までに、今回の遠征で、経験したり、聞いたことを若干ながら記してみたい。

日本のU－23の力を見たいことと、ユニスを吸収したことやマキシモフ・ロシア代表チーム監督を招いたことで、チェスカのチーム力がアップしたと聞いているので、開幕前にそれを確認したいとして、ロシア協会アレキサンダー会長がクンツボスポーツホールへ観戦に来てくれ旧交を温めることができたが、その時に、同会長は「ロシアハンドボール界も、熊本で活躍した選手の今後の年齢等を考慮すると、シドニー、アテネをねらうには、若手選手の育成が急務である」としていた。

しかし、スーパーリーグをはじめとして、各リーグの再編があってスーパーリーグが6チーム構成から12チーム構成となったりしていたものの、マインが経営不振で解散、ユニスがチェスカに吸収されるとか、経済環境の悪化がクラブ経営に影響し、若手選手の育成にも厳しい環境下にあることも窺えた。

最後に、今回の遠征では、ロシアハンドボール協会、ロシア在日大使館、クンツボクラブ、同クラツホフ監督、チェスカクラブ、同マキシモフ監督のロシアサイドのみでなく、国内各方面の皆様に、多大なご支援ご協力をいただいており、紙面をお借り致しお礼を申し上げたい。

遠征メンバー

役職	ポジション	氏名	所属	身長	体重
チームリーダー		福地 賢介	（全日本学生連盟理事長・日本ハンドボール協会強化委員）		
ヘッドコーチ		松 喜美夫	（全日本U－23監督・函館大学監督）		
コーチ		田村 修治	（全日本U－23コーチ・東海大学監督）		
ドクター		佐久間 克彦	（日本ハンドボール協会医科学委員会・熊本日本赤十字病院）		
トレーナー		岩山 邦彦	（日本ハンドボール協会医科学委員会・岡本整形外科病院）		
総務兼通訳		三須 信子	（エモックエンタープライズ）		
選手	GK	吉井 丈晴	（日本大学 4年・東京高等学校）	182cm	82kg
	GK	谷川 一寿	（福岡大学 4年・久工大付高校）	184cm	80kg
	CP	所 努	（早稲田大学 4年・香川中央高校）	173cm	64kg
	CP	武藤 崇之	（早稲田大学 4年・盛岡第一高校）	180cm	72kg
	CP	小藪 憲次	（中央大学 4年・桃山学院高校）	176cm	68kg
	CP	井上 博人	（日本体育大学 4年・桃山学院高校）	172cm	68kg
	CP	谷口 了	（日本体育大学 4年・北陸高等学校）	182cm	76kg
	CP	下川 真良	（大阪体育大学 4年・北陽高等学校）	170cm	65kg
	CP	小川 友康	（筑波大学 4年・小松工業高校）	176cm	70kg
	CP	永島 英明	（大阪体育大学 4年・此花学院高校）	188cm	80kg
	CP	瓜生 直季	（法政大学 4年・春日高等学校）	188cm	83kg
	CP	古家 雅之	（筑波大学 3年・桃山学院高校）	184cm	73kg
	CP	鶴見 拓	（日本大学 3年・土浦日大高校）	175cm	64kg
	CP	松林 克明	（日本体育大学 4年・桃山学院高校）	181cm	70kg
	CP	加藤 雄星	（順天堂大学 4年・小松工業高校）	182cm	80kg
	CP	植木 宏和	（福岡大学 4年・大分電波高校）	181cm	68kg
	CP	高田 元輝	（早稲田大学 4年・香川中央高校）	181cm	71kg

ロシア遠征報告

ロシア遠征から得たもの

松 喜美夫

スピードのある精度の高いオフェンスと、大型プレイヤーに対する積極的なディフェンスを課題とした、選考と強化のための今回のロシア遠征であった。

オフェンス面では、ヒロシマ国際の経験が大きく、東西学生選手権大会終了後、時間がなくて満足な練習が出来なかったわりには、それなりのコンビネーションを見せていて、所の読み、小藪のややトリッキー気味な異なった両ゲームメイクから一応の得点力を見せていたが、1試合でのミスの発生率は平均16回弱となっており、この点の改善が課題となっている。

ディフェンス面を見ると、190cm台が不在で、大型の外人を相手にしては、現時点ではパワー不足は否めず、瓜生、永島、古家、松林などの頑張りはあったが、後半のスタミナ消耗時に押し込まれたり、振られたりするシーンが、しばしば見られて失点となっていた。

第14回男子世界学生での上位進出は、ディフェンス陣の強化、頑張りがあったものであり、今後、オフェンスパターンの多様化とデ

ィフェンスシフトが大きな強化ポイントとなって来るので、この点を強化したいと思っている。その意味でも、今回の遠征の成果は大きかった。

試合結果

◆8月27日

U − 23
31
17 14
17 20
37
КУНЦЕВО-I

U−23の先取点でスタート。6分以降、クンツボに速攻などで4点連取され、その後、5点差を攻防に、一進一退で推移したが、20分過ぎに、U−23が速攻などで逆に4点連取して、1点差に詰め寄った直後、ミスが出て突き放され前半は6点差で終わった。

後半は、U−23が良く頑張り、一時は2点差としたが、ロシア代表KEKELIA・DAVID中心に確実なプレーを見せるクンツボーIにミスを衝かれ、主導権を握られたまま、自分のペースに巻き込めず、前半の点差のままで終了した。7月にヒロシマ国際で対戦したアイスランドチームとは異なる高さと手足の長さに、第1戦としての戸惑いが感じられ、敗れはしたが、ロシアスーパーリーグ所属チーム相手に、10得点の下川、6得点の鶴見の両サイドのスピードのある攻撃と古家の積極的なミドルシュート、また、所のゲームメイクからの早い攻撃（速攻のみでなく、パスワーク・カットイン含）にも見るべきものが窺えた。

なお、クンツボーIは、ロシアスーパーリーグでは平均年齢が一番若いチームとされ、20才から25才内外で構成されている。

◆8月28日

クンツボーIと異なり、若手中心の伸びやかな印象で、速攻を多発するスピードのあるチームで、U−23にやや似たチームカラーである。U−23は選考も兼ねている関係で、昨27日のスタメンから一新したメンバーでスタートした。

立ち上がりは、お互いの探りあいであったが、U−23の消極的なプレーから足を封じられて、ミスが出た7分過ぎからクンツボーIIの速攻を許し、連続7失点で前半9点差の大差で終わり、大勢が決したかに思われたが、後半は、第1戦出場の選手で固め、特に瓜生、永島、古家、松林等の踏ん張りと、所の好リードで攻めのリズムを取り戻し、下川、井上の積極的なサイドアタックで4点差まで詰め寄ったもののクンツボーIIに逃げきられた形で終了。

瓜生、永島、古家、松林のDF陣の頑張りと、ゲームメイクしながらも10得点した所の活躍が、今後の明るい材料となった。

◆8月29日

U−23は、所の積極的なゲームメイクを起点に早い攻めを見せてチャンスを作るが、最終的には詰めの良いクンツボーIDFのプレッシャーかノーマークシュートのミスなどあがって、今一つ得点が伸びず、前半を5点差で終わる。

後半は、DF陣の頑張りをバックに、所、小薮両センターの好リードから小川、古家のフローター陣のミドル、下川、鶴見のサイドアタック等で20分過ぎまでは粘り強く3点差をキープしたが、その後、クンツボーIのパワフルでテクニックのある個人技に4点連取されて敗れた。なお、この試合でも、大きい相手のDFが課題となっているが、今後のDFシフト（0−6・3−2−1他）決定の参考となる試合であった。

◆8月31日

U−23は、スタートからDF・OF共に良く足が動き、7分過ぎから速攻、サイド攻撃（下川・井上他）、カットイン（所・小薮）などでバランスの良い攻めを見せ、6連続得点して主導権を握り、その後もコンスタントな得点と、0−6DFシフトで良く守り、前半を6点差で終了。

後半に入っても、谷口・小川・古家などのロング、サイドの速攻などで先行し、一時は21対11と10点差をつけた。残り10分から5分にかけて、大量リードと大きい相手の対戦によるスタミナ消耗もあり、7点差まで追い上げられたものの、危なげなくロシア遠征の1勝を飾った。

◆9月1日

クンツボクラブとの最終戦であり、お互いに気の入った一戦となった。U−23は、右サイド＝小薮（下川は怪我）・右45度＝古家・センター＝所・左45度＝小川・左サイド＝鶴見・ポスト＝瓜生のOFスタートメンバーで試合が開始された。

前日の勝利の余勢とDF陣の頑張りがあって、最後まで1点を争う、どちらが勝つかわからない展開であったが、1点の重みを充分に実感させられる試合（所主将評）であった。

両サイド攻撃、ミドル、速攻に、今までクンツボに封じられていたポスト攻撃と幅広い攻めを見せて

1点を取り合う接戦となったが、後半、残り10～5分の課題であるDFのスタミナ（メンタル部分も含む）の衰えも見られず最後まで頑張ったが、1つのミスで惜しい試合を失った。

◆9月2日

U－23 27（15－16、12－11）27 CSKA

チェスカは、スーパーリーグ前期4位のチームで、ロシア代表（CP・GK）、前回の世界学生参加ロシア学生代表3名のいるチームで、本年度から、ユニス（前スーパーリーグ）を吸収合併し、新たにマキシモフ監督（ロシア代表監督・熊本世界選手権大会優勝監督）を迎えた上り坂のチームで、今季のスーパーリーグ制覇をねらっていると言われているが、そのチーム力を視察のために、ロシアハンドボール協会アレキサンダー会長も観戦に来ていた程であり、モスクワで期待されているチームである。

ロシア代表選手をベンチに下げ、若手中心のメンバーでの先発であったが、パワーとスピード、正確なプレーで先制。11分までは6対3。その後、3点差を追う展開で推移、17分過ぎに小川、古家、所の3連続得点で追いついた。20分過ぎに、主将所が怪我で退場というアクシデントがあったが、しかし、小薮・谷口が良くその穴を埋めて、終了間際に2点連取で1点リードで折り返した。

後半も良いスタートを切り、一時は3点をリードしたが、15分過ぎにロング・ポストで同点に追いつかれた。その後は、小川のロング、小薮のアンダー、古家のミドル、松林の速攻などで加点したが、チェスカも得点を加えた。終了前2分強の25対25の時に、U－23に退場者が出て25対26にされて、そのままズルズルかと思われた時に、5人で良く動きコンビネーションを使いながら26対26にし、さらに、その後、1点づつ取り合って、残り時間50秒を5人で良く守り27対27で引き分けた。DF陣の頑張りが引き分けた大きな要因であった。

▼参考資料（チーム）

※カッコ内は、総攻撃回数に比較した。

所	8・27 クンツボ-Ⅰ	8・28 クンツボ-Ⅱ	8・29 クンツボ-Ⅰ	8・31 クンツボ-Ⅱ	9・01 クンツボ-Ⅰ	9・02 チェスカ	9・03 チェスカ
攻撃回数	71回	64回	71回	61回	68回	54回	65回
シュート	55本（77%）	49本（76%）	55本（77%）	48本（78%）	54本（79%）	43本（79%）	40本（61%）
得　点	31点（56%）	29点（59%）	23点（48%）	30点（62%）	28点（51%）	27点（63%）	19点（47%）
ミス発生	16回	15回	16回	13回	14回	11回	25回

◇1試合の平均攻撃回数=64.9回　◇1試合の平均シュート数=49.1本　◇ミスはGKも含む

▼個人得点記録

	8・27 クンツボ-Ⅰ	8・28 クンツボ-Ⅱ	8・29 クンツボ-Ⅰ	8・31 クンツボ-Ⅱ	9・01 クンツボ-Ⅰ	9・02 チェスカ	9・03 チェスカ
所	3	10	1	5	4	2	怪我欠場
武藤	0	0	0	0	0	0	1
小藪	0	3	2	2	4	3	2
井上	1	5	0	5	0	0	1
谷口	1	2	0	2	2	1	1
下川	10	1	5	6	怪我欠場	怪我欠場	怪我欠場
小川	3	0	5	4	1	9	4
永島	1	1	0	0	2	1	0
瓜生	0	1	1	1	2	0	2
古家	6	0	2	3	7	5	1
鶴見	6	0	6	0	4	3	2
松林	0	0	1	0	1	3	4
加藤	0	2	0	2	0	0	0
植木	0	2	0	0	0	0	1
高田	0	2	0	0	0	0	0
GK 吉井	0	0	0	0	0	0	0
GK 谷川	0	0	0	0	1	怪我欠場	怪我欠場

◆9月3日

U－23 19（12－20、7－16）37 CSKA

チェスカは、昨日の引き分けが不本意として、試合前のアップから気迫に満ちていたが、スタメンは5日よりのスーパーリーグの開幕戦に合わせてか、昨日のメンバーにロシア代表（GK・サイド）を加えた正規メンバーでの対戦となった。

U－23は連戦の疲労からか、滑り出しの調子が悪く、パスミス他イージーなミスがあって、それをチェスカに拾われ速攻で確実に加点されて、前半で勝敗を決められた。

後半も、GK吉井の好キーピングが出たが、チャンスを確実にものにしたチェスカに圧倒され、なすすべもなく敗れ、スーパーリーグの高さとパワー、正確なプレーをまざまざと見せつけられた一戦であり、まだまだディフェンスの強化、大型プレイヤーへの対応に、課題の残す一戦であった。余談ではあるが、ハンガリーで開催された男子世界学生への参加選手の動向を知る事や、旧交を温める事ができた。

東日本学生選抜ロシア遠征について

㈶日本ハンドボール協会評議員　関東学生ハンドボール連盟理事　**滝口　三郎**

　関東学生選抜の団長として、過去、ドイツ・フランス・スイス・オランダ・その他へ何回かの遠征経験はあるが、ロシアは初めてであり政治情勢の不安定、治安面など若干の不安を感じながらも、また、逆に、いろいろな面でロシアはどのようなところかといった期待も交差しながら、全日本学連福地賢介理事長より話のあった、東日本学生選抜チームの団長兼監督を引き受ける事となった。

　東日本学生選手権大会の後や国体ブロック予選の関係もあって、チームとしての合同練習は少なかったが、今回の日程を見ると、モスクワを離れることなく、全日程を同一宿舎（オリンピックセンター）、同一会場（クンツボ体育館）で、到着した翌日から出発日の前日まで、8日間で7試合を行うという日程が組まれたので、従来の試合の中から自分でつかみ取るというよりは、午前＝練習、午後＝試合とか、その反対のスケジュールで、合宿形式に近いトレーニング研修であった。

　学生界のレベルアップや若手指導者の育成、地域交流といった遠征目的であるが、技術的には、ロシアのスーパーリーグに所属するクンツボーIやハイヤーリーグに所属する若手中心のクンツボーIIのチームの、高さ、パワー、スピード、基本に忠実なプレーが、選手への大きなプラス材料であった。また、クンツボチームのコーチによる講習会も、熱心で丁寧なものであって言葉の不自由なハンディも感じられない程であった。

東日本学生とクンツボ選手

　全日本U－23対チェスカ戦を観戦できたり、U－23選手と帯同で東日本のみでなく、各地区との交流ができた事で、当初の目的を果たしたと思う。

　若手コーチもロシアのハンドボールの技術のみでなく、何事も積極的に吸収しようという姿勢が見られ、今後の指導に期待が持てた。

　紙面の都合もあり、簡単にまとめさせてもらったが、ハンドボールのみでなく、その他、いろいろと勉強させてもらった初めてのロシア遠征であった。

　学生選手の意欲も充分に感じられたし、機会が与えられれば、また参加したいと思う程であった。

　最後に、ご関係皆様のご協力にて、遠征が無事終了する事ができた事を、お礼申し上げたい。

●東日本学生選抜チームロシア研修遠征報告書

試合結果

◆8月27日

東日本学生	前半	後半	КУНЦЕВО-II
25	12－16	13－15	31

　長旅と到着翌日でありながら、前半は岡部（日体大）・栗田（同）・桜庭（順天堂）などが良く動き、一進一退で推移した。後半、2分から東日本学生にイージーミスが出て、3連続失点、さらに、15分から25分までに7失点を許して突き放され、残り5分間を1失点に抑えて、北川（国士館）・宮城（同）・栗田・瀧川（日体大）で追い上

げたが届かず敗れた。高さとパワーに対して、スピードで良く頑張った。

◆8月28日

日本
東学生
25
12-13
21-14
35
КУНЦЕВО- I

前日のU－23の試合振りから見て、クンツボーIIと異なり、スーパーリーグ所属チームで、さらに、高さとパワーアップされたチームで、正確さやスピードがあり苦戦が予想されたが、前半開始5分間は、探り合いのような展開で両チーム共に無得点で経過。5分過ぎにクンツボがすぐに先制されたが、栗田の速攻からすぐに取り返した。その後、東日本学生のゆっくりした攻撃に相手がペースに嵌り、18分までは外口（函館大）の好リードで江藤（日本大）・栗田が加点し先手を取っていった。しかし、19分からは東日本学生のミスを衝かれて4連続得点を許して、その後は1点づつを取り合い前半は1点差で終了。

後半、東日本学生は、平井（日体大）などのディフェンス陣の頑張りもあったが、動きの鈍った東日本学生をクンツボが翻弄して着実に得点を重ね大差で終了した。東日本学生の中では、ディフェンス平井、オフェンスでは栗田・桜庭のコンスタントな活躍が目立った。

◆8月29日

開始早々1分、クンツボーIIに先行されたが、その後は、市山(函館大)・江藤で同点に追いつき、10分過ぎまでは2対2のロースコアで推移。その後、ミスを衝かれて3点連続・4点連続と失点があって離されたが、残り7分からディフェンスの頑張りを背景に、伊禮（日体大）・栗田・瀧川の連続速攻と桜庭のミドルで5点差にして前半を終了した。

後半開始早々に2点連続得点されて16対9と7点差にされた時は、このままズルズルといくかと思われたが、ムードメーカー瀧川の7分・8分の連続得点と9分江藤の得点から流れが代わり、13分から平井などのディフェンス陣の頑張りとクンツボの雑な攻めで10分間無得点の間、栗田の速攻、桜庭、宮城（国士館）のミドル、瀧川の速攻と7点連続加点し逆転、その後も、残り5分間で瀧川、宮城、伊禮が加点して、ロシア遠征初の勝利を手中にした。

◆8月31日

開始早々宮城のミドルの得点で先行、その後、クンツボに3連続得点を許したが、6分に岡部、7分に宮城、8分に栗田と連続得点で追いついたものの、その後、攻撃が単調となり、無得点で経過する中、クンツボに5得点を許し、そのままの流れで前半を終了。

後半に入っても、東日本学生の動きが悪く、瀧川、江藤、北川の単発得点で推移し、大敗した。

◆9月1日

29日に逆転負けしたクンツボは、スタートから気迫のある攻撃を見せてきたが、それが気負いとなってミスが出て、10分までは4対4のイーブンで推移した。しかし、その後は、確実なゲーム運びを見せるクンツボが常に先行し、栗田、桜庭、大村（日体大）などの得点で迫るが、前半を終了。

後半10分までは、お互いが点を取り合う形で前半の6点差のままで経過したが、15分過ぎから東日本学生のミス多発で無得点の間にクンツボに得点を許し、残り4分で、市山、伊東(函館大)、今野(拓

遠征メンバー

団長兼監督			滝口 三郎	（関東学生連盟理事）		
団長補佐			福地 賢介	（全日本学生連盟）		
コーチ			市村 志朗	（法政大学コーチ）		
コーチ			岡本 大	（茨城大学コーチ）		
総務兼通訳			鈴木 千織	（エモックエンタープライズ）		
選手	1	GK	橋本 剛	（国士館大学	3年・横須賀学院高）	183cm
	2	CP	江藤 嘉宣	（日本大学	4年・大分電波高校）	189cm
	3	CP	伊禮 尚武	（日本体育大学	4年・興南高等学校）	178cm
	4	CP	栗田 憲一	（日本体育大学	4年・東根興業高校）	172cm
	5	CP	岡部 類	（日本体育大学	4年・桐光高等学校）	167cm
	6	CP	桜庭 正明	（順天堂大学	3年・三本木高校）	188cm
	7	CP	一之瀬 真志	（茨城大学	3年・日立第一学校）	183cm
	8	CP	北川 貴亮	（国士館大学	3年・伊奈高等学校）	182cm
	9	CP	平井 徳尚	（日本体育大学	3年・熊本市商高校）	180cm
	10	CP	宮城 泰成	（国士館大学	3年・興南高等学校）	177cm
	11	CP	大村 佳史	（日本体育大学	3年・伊奈高等学校）	176cm
	12	GK	小林 聖	（国士館大学	3年・横浜商工高校）	180cm
	13	CP	瀧川 義史	（日本体育大学	3年・桃山学院高校）	175cm
	14	CP	市山 貴一	（函館大学	2年・城山高等学校）	190cm
	15	CP	伊東 治	（函館大学	2年・西武台高校）	184cm
	16	GK	釣本 将洋	（拓殖大学	2年・拓大第一高校）	184cm
	17	CP	今野 友宏	（拓殖大学	2年・拓大第一高校）	180cm
	18	CP	外口 智久	（函館大学	1年・九州学院高校）	181cm
	19	GK	向谷内 祥元	（函館大学	1年・高岡向陵高校）	188cm

殖大）が連続得点したものの、オフェンス・ディフェンス共にバランスが悪く大敗した。

◆9月2日

東日本学生	前半		後半		КУНЦЕВО-II
25	11	16	14	15	31

大村の得点で先制したが、5分過ぎにイージーミスから3連続失点し、15分経過時点で6対11とリードされた。その後、大村の好ゲームメイクから宮城のカットイン、瀧川の速攻などで追い上げるが、体格、スピード、パワーに押され気味に推移し、11対16で折り返した。

桜庭のシュート

後半に入り、江藤を中心に、市山、一之瀬（茨城大）、平井などのディフェンスの連携が良くなって、オフェンスも、宮城のミドル、カットイン、瀧川のサイド、外口のミドル、北川のポストなどで互角に戦ったが、前半の5失点が大きく立ちはだかり敗れた。小林（国士舘）、橋本（同）、鶴本（拓殖大）などのGKを含めた守りの良さが見られた。1年生ながら外口など今後の活躍が期待される選手もいた。

◆9月3日

東日本学生	前半		後半		КУНЦЕВО-II
28	17	17	11	12	29

今回の遠征の最終戦という事で、『絶対に勝つ』という気持ちが全面に出て、ムードも良く、それが試合内容にも表れて、全員で守り、攻めるというチームが機能し、前半から伊禮、瀧川、大村、栗田、一之瀬などでコンスタントに得点を重ね、江藤・平井・市山を中心にディフェンスも良く頑張った。

後半に入っても今野、大村、栗田などがチャンスを生かして得点、一進一退の展開が続いた。28分、栗田の速攻で同点に追いついたが、40秒後にクンツボに決められて、1点のアヘッドとなった。残り15秒、大村のシュートがゴールを割る事ができず、1点差の惜敗となった。最終戦を飾れなかったが1点の重みを充分に経験できた有意義な試合であった。

雑記

福地賢介

2年に一度、東日本ブロックの各学生連盟の共同行事として、技術習得・地域交流・国際経験他を目的に、1994年から2年に一度行われている研修遠征である。

前2回はドイツ（フランクフルト中心とグリュンベルグ中心）であったが、今回は遠征先環境、費用、その他諸条件を考慮し、全日本アンダー23（全日本U－23）と帯同の形でロシア遠征となった。

モスクワオリンピックの時の選手宿舎とされており、建物の老朽化は否めないものの、現在でも、モスクワで開催される大会の宿舎として利用されていて、我々の入る1ケ月程前に行われた世界ユース大会の宿舎ともなっていた。

クレムリンから北北西に位置したところで、地下鉄のクンツボスカヤ駅から徒歩12分程の地下鉄線路（この区間のみ地上走行）脇の道路から一歩入った閑静な郊外地で、近くには日本で言う公団的なアパートが数棟建っていた。隣接地には商店の類はなく、クンツボスカヤ駅前にコンビニ的な店舗及びキオスク的なものが所在していた。選手の買い物もここまで来ないと出来なかった。

宿舎はU－23と同じであり、浴室はなくシャワー対応であった。

食事も同一メニューであったが、朝食は、ミルク粥というか牛乳に米入りのスープといった感じのもので、甘味が強めで最初に食した時は、特に抵抗感がなかったものの、数日続くと食が細くなる。このスープにパンにサラミかソーセージが2～3切ついていた。昼食がメインでボリュームのあるものが良く出ていた。夕食は総体的に軽めであったが、ボリューム的にはそれなりのものがあった。

短期間で集中的な試合と講習会で合宿といった形式であったが、個々に、それぞれが大きな収穫であったと思われる内容であった。

ロシアのハンドボール事情に関しては、U－23の報告があると思うので、ここでは、敢えて触れないが、研修遠征としての環境は申し分なかった。

遠征前に、在日ロシア大使館関

係者より、ロシアの治安悪化が目立つので、夜は表通りから脇道に入らないようにと忠告を受けていたが、前述のごとく宿舎環境はそのような場所ではなく、夜間の外出そのものもせず、この点での問題もなかった。

今回のメンバーは関東及び北海道学生連盟加盟選手であったが、国体予選とバッティングしたため北信越及び東北学生連盟選手が参加出来なかったので、今後は、この点の調整の必要を感じた。

4年生＝3名（指導者志望）・3年生＝9名・2年生＝4名・1年生＝2名の選手構成であったが、岡部・伊禮・栗田の4年生が良くチームを引っ張ってくれたが、3年生も良くアシストしていたのがチームの雰囲気に反映していたと思われる。1～2年生も良く頑張り、帰国後の秋季リーグ、その後各大会などで期待を持てる選手が多かった。

コーチ陣は、将来の指導者を志望している市村・岡本両若手コーチに依頼したが、両コーチともに熱心に研修していた。コーチ術のみでなく、あらゆる面で知識吸収しようとする意欲が感じられて、ロシアハンドボールの基本戦術のインプットされているコンピュータソフト（ロシア語版）の入手や参考書の取得とか意欲的な姿勢が見られた。なお、岡本コーチは、1994年に行われたドイツ研修遠征の時に1年生ながら参加経験があり、その遠征が今回の遠征にも繋がっているとしている。

ロシア遠征について

岡部 類

私は、中学1年生の時から11年間ハンドボールをしてきて、今回の東日本学生選抜選手としてロシアに遠征ができたことは、私のハンドボール観においても、これからの自分の人生においても大変勉強になりました。ロシアはハンドボール界において世界1位ということもあって行く前は緊張の連続でした。そして、ロシアの選手はやはり大きく、本当にこんな選手達と自分が試合をするのかと驚きばかりでした。しかし、実際は試合をしていくと最初の方は大きさに圧倒され小さくなってしまって自分の得意とするプレーができないままでしたが、試合をこなす度に、大きさやパワーはすごいものの、スピードやテクニックは日本人の方が上回っていることに気づき、徐々に自分のプレーができるようになってきて、ロシアのチームに1勝できたことは、私にとって自信につながりました。また、今回の遠征でキャプテンとして、いろいろな大学で違うプレーをしてきている人間が集まって、1つのチームにまとめようとがんばった結果が、1勝という良い結果が出せたことで大役を果たせたような気がします。また、ロシアは物価が暴落していて、日本と一緒なのに驚いたことと、国中がタバコの国という印象を持ちました。今回の遠征は私にとっていろいろな意味で大変勉強になりました。

▼参考資料（チーム）

※カッコ内は、総攻撃回数に比較した。

	8・27 クンツボ－Ⅱ	8・28 クンツボ－Ⅰ	8・29 クンツボ－Ⅱ	8・31 クンツボ－Ⅰ	9・01 クンツボ－Ⅱ	9・02 クンツボ－Ⅱ	9・03 クンツボ－Ⅱ
攻撃回数	68回	69回	68回	68回	62回	70回	61回
シュート	44本(64%)	50本(72%)	56本(82%)	43本(63%)	44本(71%)	48本(68%)	46本(75%)
得　点	25点(36%)	25点(36%)	28点(41%)	20点(29%)	19点(31%)	25点(36%)	28点(46%)
ミス発生	24回(35%)	19回(27%)	10回(15%)	25回(37%)	18回(29%)	22回(31%)	15回(24%)

◇1試合の平均攻撃回数＝66.6回　◇1試合の平均シュート数＝47.3本　◇ミスはGKも含む

▼個人得点記録

	8・27 クンツボ－Ⅱ	8・28 クンツボ－Ⅰ	8・29 クンツボ－Ⅱ	8・31 クンツボ－Ⅰ	9・01 クンツボ－Ⅱ	9・02 クンツボ－Ⅱ	9・03 クンツボ－Ⅱ
江　藤	2	3	1	2	3	0	1
伊　禮	1	2	3	1	1	0	3
栗　田	6	7	4	5	4	4	9
岡　部	3	2	0	3	0	0	1
桜　庭	2	3	5	1	3	1	1
一之瀬	0	0	0	0	0	0	1
北　川	2	0	0	2	0	2	0
平　井	1	2	0	0	1	0	0
宮　城	3	3	3	2	1	6	0
大　村	1	0	0	0	3	5	5
瀧　川	4	0	9	3	3	2	5
市　山	0	0	3	0	0	3	1
伊　東	0	0	0	0	0	0	0
今　野	0	1	0	1	0	0	1
外　口	0	1	0	0	0	2	0

平成10年度第2回日韓交流合同合宿（U－16）報告

U－16女子監督　高野郁代（福井市明倫中学校）

第2回日韓交流合同合宿が平成10年8月11日から16日まで、横浜市平沼記念体育館で行われました。今年度は、昨年の反省も踏まえて高校1年生のチームを編成しました。昨年の全国大会及びJOC大会（中学3年生）で優秀な選手を選び、今年の6月13・14日に選考合宿を行い、16名を選考しました。昨年のメンバーは選考会を開く暇もなく交流事業になり、苦しい戦いとなりましたが、今年度は全国から選ばれた選手ということで、選考合宿も充実したものとなりました。また、韓国の方も16歳以下のチームを編成することは不可能と言っていましたが、今年度は中学3年生のチームで選抜してきました。

今年度は、この段階で韓国チームをつぶし、選手達の「韓国には強くて勝てない」という意識をなくしていきたいと思っていました。横浜の初日はお互いの遠慮も見られ、頼っている練習となり、声の大切さやコミュニケーションをとることなどをしっこく注意している状態でした。体が動かなくなって辛くなるとミスが連続し、自分達で盛り上げることができなくなりました。2日目は、午前中韓国の練習を合同で行いましたが、一番の違いは、韓国はスピードとステップの一歩が広く、まず横にずれる所でした。午後は速攻を練習しましたが、韓国をトップスピードにさせる前につぶせなくて持ち込まれていました。諦めている場面や戦う気持ちが足りず、なれ合いでやっていました。自分のやれることもやらずに気持ちで負けている選手に情けない、自覚がないという気持ちで一杯になりました。U－16としての意識、選ばれた時点からの自覚をどうもたせるかが大切だと前回同様思いました。また、短時間で一人ひとりの良さを引き出す難しさなど課題は残りました。3日目は午後から練習試合をしましたが、ディフェンスが引いていたことやポストの受け渡し、ムードの盛り上がりなどに欠けました。苦しい時に声が出ずズルズルと加点され引き離されました。攻撃では千葉のシュートがよく決まり、確実に得点できたことは大きな収穫でした。一人ひとりの力は昨年とは確実にアップしており、全面に気持ちを出してコンビを練習していけば必ず勝てると思いました。その点についてよくミーティングをして交流試合に臨みましたが、練習試合同様ポストの押し上げが足りなかったり、チェンジが遅れたりして得点されました。速攻は早めに潰していたのであまり得点に繋がりませんでした。サイドの加藤が4得点とがんばり、ポストに野島を使い、木下のカットインなどで得点しましたが、どうしても千葉や宮崎の間合いが近くシュートが打ちにくい場面も多く攻撃が単調になっていました。ディフェンスをかわして打つこと、タイミングを工夫するなどが不足していました。もっと積極的にシュートを狙うことが必要でした。試合の中で良い時と悪い時の差が大きかったので、集中力を持続させていきたいです。また、辛い時に自分に負けない強い気持ちを持たせることが、この時期の選手達に特に必要だと強く思いました。

この点を考えて訪韓に備えられるよう、各チームに戻って自分がやらなくてはいけないことを確認して横浜を終えました。

24日より訪韓し、貞信女子高校で練習が始まりました。前日の大阪でのミーティングで、韓国からたくさんのことを盗んで、学んでこれからの財産として欲しいことを話してありましたが、初めての外国という緊張感もあり、初日はミスの連続でした。横浜から声の大切さや気持ちの大切さを指導してきたので、今回は横浜よりは選手の意識も少し変わっていました。2日目は、ディフェンス練習を中心にコンビを作っていきました。なかなかディフェンスのための声が出せなくてやられていたり、間をスピードでカットインされたりしていました。韓国チームは、1対1やロングシュートが強いので、積極的に前に出て高い位置で当たり、抜かれたら下の2人で挟む練習をしました。攻撃は、ポストの機能が働いていないため、ポストと合わせるためのパターン練習をしました。午後は、練習試合で、午前中に練習したことを少しでもやろうとしましたが、前ブロックからロングシュートを打たれたり、高い位置に出ても下がれずポストに自由自在にやられていました。速攻でも12メートルから決められたり、韓国のすごさを思い知らされました。また、苦しくなった時は必ず1対1で抜いてくるなど、本当に各選手の能力は素晴らしいものでした。

3日目は、午前中合同練習で、ステップなどを基本から指導してもらいました。選手は、ついていくことが精一杯で正確さに欠けました。ボールを持つとその差が、もっとはっきりしました。全てにおいて日本は、姿勢が悪いためにミスが起きると指摘されました。ディフェンスも手で守っているので足が全然ついていかず、やられてばかりでした。

ステップの速さ・正確さ、1対1の強さ全てを選手達は肌で感じて良い刺激になったと思います。そして、自分に何が欠けているのかを、自覚できたと思います。韓国のステップの正確さは、小・中学校の間にゆっくり時間をかけて正確に教えており、日本の様に試合に合わせた指導をしていないようです。基本を徹底して指導し、高校からパス・シュート（技術）に入るので、ミスも少ない様です。選抜チームになっても違和感なくできるは、国としての指導体制がしっかり確立されていることが、日本との大きな違いでした。

交流試合では、とにかく今まで

やってきたことを全て出していこうと、確認しましたが、前半5分くらいは1対0でした。疲れてくると声も出なくなり、守れないから攻撃のリズムも作れず、前半は、5対13でした。しかし、千葉や長野のロングが決まったことは収穫でした。後半は、ロングを狙わずポストにばかり落としていたため、速攻で加点されていきました。最終的には11対25（最小失点）でしたが、まだまだ選手は力を出していないゲームだったと思いました。各チームのエースの集まりということで、なかなか全員で得点するというよりは、各自が今もっている力で得点している状態でした。昨年は、できなくて当たり前の選手達がよくがんばってくれたけれど、今年は、もっとできるメンバーだと思いこんでいたため、自分の中でギャップが生まれたことも事実です。やってくれるだろう、という思いが大きかったので試合が終わって、ノックをしました。その後、今はプレーより気持ちの方が大切だということをもう一度話しました。キャプテンの木下がリードしてきましたが、前の練習試合で怪我をして、交流試合に出られなかった分をいったい誰が出してくれたの？と、涙ながらに訴えていました。このみんなで流した涙を忘れることなく、これから努力して欲しいと思いました。

これでU－16も解散しますが、これからずっとU－16だったことがついていくこと、これからが大切だということを話して、解散しました。

〈成果・課題〉

今回の交流試合を終えて、選手の中に韓国は勝てる相手だ、という意識が芽生えたことが大きな収穫でした。試合前には、韓国はすごくて勝てるはずはないと思っており、練習を見ても圧倒されていましたが、ポイントさえ練習したら勝てるという気持ちが生まれたことは、昨年にはなかったことです。今年はこの点を課題としていたので、大変うれしいことでした。また、昨年は谷口（ジュニア選手）に頼っており得点も決まった選手ばかりでしたが、今年は全員が得点していることでもレベルが上がっていると思われます。自分のプレーが韓国相手に通用するという自信がもてたことも大きいと思います。意識が変わった時点でプレーが変わっていくことや、みんなで苦しい練習を、声で励ましていけば楽しいハンドボールができることを選手が実感できたことも成果です。

育ってきた環境も全然違う選手達を苦しい練習を通して、ひとつのチームにまとまっていくことは大変と同時に楽しみでもありました。チームの中の自分の役割を自覚しながら合宿を過ごすこともできました。選手選考の段階で各ポジション4人ぐらいは選ばないと苦しい選手起用になると思います。今回左利きのサイドや攻撃的なポスト、ゴールキーパーが足りませんでした。また、参加選手の怪我も大きな誤算でした。交流試合でも、その点で苦しい戦いとなり、どうしてもメンバーチェンジができず、同じ選手を起用しました。このU－16をU－19（ジュニア）、U－23、ナショナルにつなげていくために何をすべきか、ということを考えたら、ハンドボールに対する姿勢や練習に対する態度、一人でも多くジュニアに上がっていける選手の発掘だと思います。もちろん日の丸をつける意味と自覚を持たせ、たくさんの経験（同年代の外国選手との試合）をさせていくことが大切だと思いました。昨年ジュニアと同行したイタリアのテラモ大会など同年代ごとの大会に参加することで、良い刺激になりハンドボールに対する考え方も変わるのではないでしょうか。日韓交流をきっかけに始まったU－16ですが、これだけに終わらずせっかくできたチームなので、是非いろいろなチャンスを与えてもらいたいです。また、毎年メンバーの入れ替えはあっても同じメンバーで編成していけば、上達度もはっきりしてくると思います。高校1年生のこの時期は、スタメンとして活躍している選手とそうでない選手の差がはっきりしており、進学した高校の差もでています。今回のU－16の選手よりも伸びている人材がいるので、その選手を何とかピックアップして、選考会に参加させるなどの方法が必要と思われます。そして、けが人を出さないためにも是非やらなくてはいけないことだと思います。U－16の選手とジュニア選手との合同合宿なども大切だと思います。U－16の選手にナショナル選手であこがれの選手はいるか、と質問したところ、卒業生なら知っているが誰も知らない、という返事が返ってきたことには驚きと同時に寂しい思いをしました。でも、それが現状なのでしょう。韓国のさよならパーティーの席上で、柳副会長が、日本との歌合戦で動きのよい選手を「ナショナルに引き上げる」と言われたら、選手は必死にアピールしていました。このような意識の差が、この時期からはっきりしていると強く思いました。少しでも選手がこの差に気づいてくれたらうれしいです。

最後に一番の課題は、期間の短い中でどのようにしたら勝てるチームがつくれるか、この事が非常に問題です。ただ、もう少しU－16のことを各チームの監督さんが理解して選手に話や激励などをして下さったら、少しは選手の意識も早く変わってくるのではないのでしょうか。そして、選考会を今年は1回しかできませんでしたが、せめて2回は行いチーム練習がたくさんできる機会や面接のできる時間を持てたら、と思います。性格的にどういう選手なのか、を良く見極めないと本当に日の丸をつける価値のある選手なのかどうかが分かりません。交流がスタートしてから失敗したと思う選手が出てきます。

この様な時期だからこそ、たくさんの経験や指導者の考えが今後のハンドボール人生に大きく関わってくると思います。たった12日間のU－16でしたが、選手達には思い出だけで終わらず、韓国選手とのジュニアでの再会を果たしてもらいたいものです。今年は、年齢差があまりなかったので、昨年よりも選手・スタッフの交流が深められたことは確かでした。この様な機会を与えていただき、心よりお礼申し上げます。

第6回中・日・韓ジュニア交流競技会に参加して

全国高等学校体育連盟ハンドボール専門部部長　千野恒夫

はじめに

　私は昨年度から全国高体連ハンドボール専門部長を引き受け、今回初めて中・日・韓ジュニア交流競技会の日本代表として大会に参加させて頂きました。初めてとはいうものの、日本協会事務局の早くからのきめ細やかなご配慮により、不安なく大会に参加することができました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

　今回参加した代表校は、選抜大会の優勝校（男子・横浜商工高校〈神奈川県〉、女子・府立洛北高校〈京都府〉）と予め決まっておりましたが、この両校が夏の全国高校総体でも優勝して参加したことは嬉しい限りでした。

大会で交流を深めた選手たち

　遠征では、両校ともさすがに日本一のチームだけあって、日頃の指導や師弟関係がきちんとしており、それゆえマナーが良く行動も速く、生徒諸君との生活は楽しい思い出となりました。

　このような状況の中で、特に私が感激したのは、開会式の選手宣誓で、日本を代表した横浜商工高校の板垣君が、中国語で名前を言って欲しいとの要望に一生懸命にチャレンジしたり、各国が余興で出す出し物の際には、洛北高校の皆さんが、中国・韓国でも流行している歌を、予め大使館で聞いておいて日本で練習しておき、現地で披露してくれたことでした。

　この、中・日・韓ジュニア交流競技会では、河北省人民政府揚副省長から、開会式の祝辞として、「青少年は21世紀を担う柱である。『友好・進歩・未来』のテーマの下に、スポーツの交流の絆を通して、友情を深めて欲しい。みんなの力で、平和・友好の明るい未来を創造しましょう」という主旨の挨拶を頂き、和やかな雰囲気のうちに始まりました。

中国との試合

　中国は、この試合に向けて男女ともに1年前より、中国全土から選手を選抜し、準備をしてきただけに、特に体格面は素晴らしく、女子の場合、日本の一番大きい選手が中国では一番小さい選手という程の差が見られました。

【女　子】

中国女子選抜　20（12—6 / 8—5）11　日本代表

　中国チームは、大きなポストプレーヤーがブロックをし、それを利用して上からロングシュートを打つという単純な戦術を多用してきましたが、対する日本チーム（洛北高校）は、体格差もあり、この攻撃をなかなか守れず、前半戦は苦戦を強いられました。

　しかし、後半に入ると、日本チームはディフェンスを2・4に変え、ロングシュートの封じ込めに出ました。これが功を奏し、味方のゴールキーパーの好捕も加わって相手チームの凡ミスを誘い、よく走って得点を重ねるなど、ようやく洛北らしいプレーが出始めました。これに対し、相手も7mTやサイドシュートで粘り、結果的に負けはしましたが、高さに対する守りなどは勉強になったと思われます。

【男　子】

中国男子選抜　22（10—4 / 12—7）11　日本代表

　立ち上がり、両チームのロングシュートからの点の取り合いでゲームが始まりましたが、中国のラフプレーとも取れるような荒いディフェンスに、日本チーム（横浜商工高）はペースをつかめません。凡ミスからの逆速攻での得点を許し、苦しい状況のまま前半が終了しました。

　後半、横浜商工高のお家芸の「手渡しパス」が決まり出すと、相手のラフプレーを7mTに持ち込み、得点にするなど追い上げムードが見られるようになってきました。しかし、中国チームのタイミング良いロングシュートと、背の高いポストに翻弄され、残念ながらゲームは終了しました。

韓国との試合

　韓国ナショナルチームは、女子がアトランタ・オリンピック準優勝、男女とも世界選手権上位入賞という実績を上げてきました。このような国だけに、小学校から一貫した、基本プレーの体得に力を入れているらしく、パスの出し方にしても、フェイントのかけ方にしても、どの選手も基本がきちんとできているように思いました。

　この基本の上に、手首の柔軟さと強さを使った力強いシュートや、走る力、ジャンプ力が身についており、とても素晴らしいチームであると感じました。

【女　子】

韓国代表　24（13—8 / 11—8）16　日本代表

　韓国チーム（貞信女子高）は、韓国ナショナルチーム候補選手もいるという、韓国女子ハンドボールの名門校ですが、体格の面では、175cm以上の選手は3人程度と、前述したような日本チームと中国チームほどの差は見られませんでした。

　しかし、フェイントを使って相手を引き寄せ、ラテラルパスやクロスプレーを上手に使ってカットインプレーを仕掛けてくるという、基本的ながらスピードあるプレーに、日本チームはついていけずに苦戦を強いられました。

　これに対し、日本チーム（洛北高）もタイミングの良いシュートや、サイド回りのフォーメーションを決めるなど、精一杯戦いましたが、残念ながら、もう一歩及ばず負けてしまいました。

【男　子】

韓国代表　35（15—10 / 20—12）22　日本代表

　今年7月に、横浜商工高が韓国遠征した折に試合をした相手だけに、横浜商工高の「手渡しパス」を早め早めにつぶす戦術に出た韓国代表チームに対して、ミスからの速い速攻などでシーソーゲームを続けていた日本チームでありましたが、凡ミスを連続したあたりから苦戦を強いられるようになり、さらに負傷者が出るに及んで、ゲームは相手ペースの展開となってしまいました。

　結果的には点差が開きましたが、日本チームの思い切りの良い攻撃は今後に期待が持てるものであると思います。

次年度に向けて

　この中・日・韓ジュニア交流競技会は、来年度、広島県で実施されると聞いておりますが、この競技会が、今後益々発展していくことを祈念致しております。

日本リーグ規律規定

1．目的

本規定は、日本リーグ運営委員会の主管するすべての試合において、反スポーツマンシップ行為の撲滅を目指し、真のスポーツマンシップをハンドボール界に浸透させるとともに、ハンドボール競技が万人に愛されるスポーツとして定着させることを目的とする。

2．規律委員会

本規定の制定、改定及び運営を行うために、日本リーグ運営委員会内に規律委員会を設置する。規律委員会は規律委員長（1名）と3名の規律委員で構成する。

本規律の運用は、原則として規律委員長がすべて行うものとし、改定は規律委員会で行うものとする。

ただし、規律に関する著しい違反があった場合には、その懲罰を決定する上で緊急に規律委員会を開くことができる。ただし、期間的な問題などで規律委員会が開催できない場合には、電話、FAXなどの相互通信により、規律委員会の代用ができるものとする。

3．対象

本規定の適用は、原則として日本リーグに登録された選手、役員を対象とする。

4．適用範囲

本規定は、日本リーグ運営委員会の主管するすべての試合（リーグ戦、プレーオフ、入替戦、セレクションマッチ）において、レフェリーに対する暴言などスポーツマンシップに反する重大な反則により失格処分を受けた選手、役員あるいは日本リーグの権威を損なう行為をなした選手、役員に対し、自動的に表1に基づき懲罰を与える。また、この懲罰は年度を越えて有効とするとともに、選手、役員が移籍した場合でも有効とする。ただし、入替戦もしくはセレクションマッチで日本リーグから脱落した場合はこの限りではない。

また、ＪＨＬカップ、ルーキーカップなど、個別の大会はその大会のみの適用とする。

※3回目の退場による失格及びプレー中の重大な反則による失格は、懲罰の対象とはしない。

※出場停止処分を受けた選手、役員は試合に出場できないだけでなく、試合会場への入場（入館）もできない。ただし、チームはその選手、役員を除いて正規の人数に補充できる。

※暴言とは、レフェリーの威厳を損なったり、挑発的な発言を言い、その判断はレフェリーに委ねる。

※ただし、下記の場合には処分を軽減する。反射的に行われた行為/挑発による場合/主導的でなかった場合/その他特別な事情がある場合

表1 適用範囲と懲罰

適用範囲	懲　罰
反スポーツマンシップ行為による失格	次の試合から2試合の出場停止
ベンチ役員の失格	同上（重大な場合10万円以下の制裁金を付加する）
追放	出場停止6試合以上及び30万円以下の制裁金
その他日本リーグの権威を損なう行為	制裁金（金額は都度決定）

5．その他懲罰

表2に示す様な行為が発覚した場合には、自動的に別途懲罰を与える。また、この懲役は年度を越えて有効とするとともに、選手、役員が移籍した場合でも有効とする。

※上記で言う「失格処分後」には、3回目の退場による失格及びプレー中の重大な反則による失格を含む。

表2 その他懲罰を与える行為

その他懲罰を与える行為	付加する懲罰
失格処分後、観客席からさらに暴言を吐く	次の試合1試合の出場停止
出場停止処分にもかかわらず入館した	次の試合から2試合の出場停止
2度目以上のレフェリーに対する暴言	同　上
2度目以上のベンチ役員の失格	同　上

＊上記で言う「失格処分後」には、3回目の退場による失格及びプレー中の重大な反則による失格を含む。

6．チーム責任

失格者もしくは懲罰に相当する行為を行った選手、役員の所属チーム（以下、当該チームと称す）は、そのチームの責任において懲罰に従うこととする。それができなかった場合には、チームにたいして懲罰を与えることとする。また、出場停止処分中の選手を起用した場合、当該チームは最低10ゴールの減点により、敗戦したとみなす。ただし、10ゴール以上の得点差があった場合には、減点ゴール数をこれに応じて増やすこととする。その際、個人記録は有効とし、減点ゴール分は個人記録へは展開しない。

7．報告

派遣運営委員は担当する会場（試合）において、すべての失格もしくは懲罰に相当する行為を行った選手、役員が発生した場合には、別途定める「失格・規律に関する報告書（様式1）」に必要事項を記入し、会場審判長及び当該試合のレフェリーの署名をもらい、当日中に日本リーグ事務局及び規律委員長へFAXする。

FAXを受けた規律委員長は、懲罰の適用が必要な場合にのみ、裁定を記入し、日本リーグ事務局あてにFAXする。

FAXを受けた規律委員長は、懲罰の適用が必要な場合にのみ、裁定を記入し、日本リーグ事務局宛にFAXする。

日本リーグ事務局は別途定める「規律に関する通達（様式2）」に必要事項を記入し、運営委員会委員長、当該チームの所属する同一リーグの各チーム、出場停止になる試合会場の派遣運営委員、開催地責任者及びスポーツイベント社へFAXで連絡する。

なお、何らかの事情によりFAXでの連絡ができない場合には、電話にて用件を通達することとする。ただし、この場合でもFAXでの処理は必ず実施することとする。

8．異議申し立て

本規定第4条及び第5条の懲罰に基づき処分を科せられた選手、役員は、その処分について異議申し立てを行うことはできない。

9．付則

1）本規定は1998年7月1日より実施する。

2）第22回（1997年度）日本リーグに発生した懲罰に相当する行為に対しては、懲罰を与えたものとみなす。

3）本規定の改定は規律委員会で検討し、日本リーグ運営委員会にて承認を得るものとする。

ハンドボール シンボルマーク募集要項

1　目的

21世紀に向けて発展するスピーディーでダイナミックなハンドボールをイメージできるシンボルマークを、広く愛好者および一般から募集し、全員参加でのハンドボールの発展に寄与することを目的とする。

2　募集対象

ハンドボール愛好者のみならず、目的に合致するマークを作成できる人ならば誰でも応募できることとする。

3　応募方法

Ａ６（ハガキ用紙）以上の用紙に、色、形ともにはっきり分かるよう作成したもの。コンピューターグラフィック等で作成したものは、プリントアウトの鮮明なものとする。

作品は、下記まで送付のこと

〒150-8050　東京都渋谷区神南1-1-1　岸記念体育館内

㈶日本ハンドボール協会シンボルマーク募集担当　宛

4　応募期間

平成10年10月１日より平成10年12月末日まで

5　審査期間

㈶日本ハンドボール協会　シンボルマーク審査委員会

6　賞品

特選　１点　賞金と賞品

佳作　２点　賞金と賞品

7　入選作品の利用について

特選作品は、㈶日本ハンドボール協会のシンボルマークとして使用し、日本協会作成の物品、ポスター等に挿入していくこととする。

98年版日本ハンドボールリーグ・カレンダー申込のご案内

ストックラン、ヴォル……日本リーグ加盟全30チームの注目選手が、来年のあなたのお部屋を、毎月入れ替りのフルカラーで飾ります（カレンダー・サイズ：34cm×47cm)。

日本ハンドボールリーグ制定品のため、残念ながら部数に限りはございますが、ご希望の方は、下記によりお申し込み下さい。受け付け次第、順次発送いたします。(品切れの場合は、代金返送でお許し下さい。)

・**納入代金**　2,000円（消費税・送料含む）

・**お申し込み方法**　納入代金2,000円に住所（送付先)、氏名、電話番号を添え、現金書留で、下記まで郵送下さい。

〒150-8050　東京都渋谷区神南1-1-1　日本ハンドボールリーグ運営委員会

（お問い合わせなどは、日本ハンドボールリーグ運営委員会　☎03-3481-2361　小松・中嶋まで）

11月の行事予定

11月16日～22日　高松宮杯男子41回女子34回全日本学生選手権大会　愛知県体育館ほか

11月22日～25日　'98ジャパンカップ　枇杷島スポーツセンターほか

11月７日　常務理事会・東京

11月22日　第２回理事会・中村スポーツセンター内会議室

HAND BALL CONTENTS OCTOBER

※表紙の写真は福井商業高校　谷口尚代選手

＊12月号は記事の都合（全日本学生大会の結果を入れるために）発行が一週間ほど遅くなります。ご了承ください。

柔らかな感触で、最適なバウンド！

新発売

PKCH3-AD DX
5,500円

new

PKCH2-AD DX
5,400円

アデランテ　前進

PKCH1-ADJ
3,600円

手縫い・国際公認球

PKCH3-AD
4,600円

PKCH2-AD
4,500円

PKCH3-ADR
2,800円

PKCH2-ADR
2,700円

明星ゴム工業株式会社

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』第三九一号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可
平成十年十月二十六日印刷 平成十年十一月一日発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 〇〇一二〇－七－一〇二九三
編集兼発行人 市原則之